御陣九州地理八道

彦山權現誓助劍

第一

留侯楚を夷げ子胥が尸に撻ちしも、讐を報いし烈孝に、美を娓べたる女王國、眞柴大樹の代を御する、霸者の民こそ皙々たれ。比は天正半つがた、大明四百餘州を奪略る手初め、三韓八道を攻むべしとて、古昔神功皇后の、遐く祥き蹤を追ひ、勝利の祈かけまくも、住吉四社に奉幣あれば、宣禰が鼓や神樂歌、乙女が袖にすゞしむる、神慮もさぞと知られける。幾世經ぬらん松原の、宮の方よのつしのし、歩みき飾る上下も、折目高なる國侍、濱邊より來る一群も、同じ家中とおぼしきが、それと見るより松が根に、かい蹲踞うてひかゆれば、「コレハ〳〵春風氏、辻新右衞門門脇儀平、三羅連にて御參詣候な。誠に當社は和歌の神、海路安全の守護に限らず、我荒魂は王師を守らんとの、詫宣まさに弓矢の守護神、歩を運ぶ心底が、直に武藝の闘といふもの、イヤハヤ殊勝に存ずる。斯いふ京極内匠、晉成公に召出され、新參ながら五百石、各方の師範たるも、他家に勝れし微塵流、武術に秀でし德なり」と、上見ぬ鷲の高慢自慢、俱に身

を吹く春風藤藏、「イヤモ先生の詞は實に金玉。夫に引きかへ一味齋、元が秀らぬ八重垣流、年は老いたり、教方の其懶惰さ。剩、此頃は、藥湯とやら何とやらで豐前へ立越え、本國にも居らぬとの噂、近々異國へ軍の御供、勵に勵を加ふる稽古、ぶら付いては居られぬ折から、こちから隙やつて、先生の弟子に成たも、殿の武用を大事とするから、マ、ナント忠臣でござらうがの」「成程、此新右衞門も其元に勸められ、先生へ弟子入してからめつきりと稽古が上る、我ながら嬉れて居ます。とうからお弟子になつて居たりや、一味齋をも今頃は、弟子に致して居ませうもの、此上ながら幾重にも」「イヤ此儀平めも先生樣のお世話により、韓へ參らばあつぱれな手柄が致して見たうござる」「イヤモなるとも〳〵。いま日本若手の强者、加藤が家來に木村又藏、福島に桂市兵衞竝に萬園右衞門等、何程力自慢でも、劍術未熟手柄は得せまい。内匠が敎ゆる術を以て、異國の敵に當るならば、樊噲張飛が向ふとも、又諸葛孔明が固むる陣でも、破るは長者の枝より易し。そこが所謂微塵流、勵まつしやれ〳〵」と、優美に見する鼻高々。聲閙しく馳來る巫、「只今中國殿御籠中、海邊眺望とて此所をお通りなさる、商人は荷を片よせ、往來は下に居ませい」と、いふもいきせきかけ通る。「面倒な御臺の御通駕。逢ふもむづかし堺へはづし、信なけれど神社佛閣、一見して立歸らん。逗留中は大阪屋鋪、歸宅後緩りと御意を得

ん」さらば〳〵と引別れ、北と南へ歩み行く。程なく先駈の歩侍、しと〳〵二行に竝松原、從者の同勢美を盡し、只繪のごとく三つ星に、一品の字を金紋の、乘物木蔭に立てければ、後乘の武士衣川彌三郎、美男の聞え高股立、綠縈よき松蔭に、床几直せばかねてより、戀する中も吉岡が、娘お菊が氈とり〴〵、御座を設けて待ちかくれば、戸を開かせて眞弓の方、嬋娟としてうづ高き、御目に汐路を眺め給ひ、「住吉の岸の向ひの淡路島、哀れとだにとつゞけたる、島山はあれぢやなう。御代治りて太平の、空に狼烟の雲もなく、地に矢叫の音をなみ、磯に群るてふ海士の子が、何憂き事のありてやは、忘れ貝取るしほらし」と、斜ならざる御機嫌に、衣川も岸につゝ立ち、「ナウ姉衆あれ見給へ、あの高根こそ武庫の嶺、馬手は丹波路弓手は摩耶、敏馬蘆屋の灘つゞき、名所古跡は多けれど、わきて名高き鵯越、源氏平家の軍した、所はあれ」と指ざせば、姉どもが延上り、「どれ〳〵何所が一の谷、敦盛樣を討留めた、古戰場かと眺めても、目路の遠さにそことしも、譯が知れぬ」となまめかし。浪間にふつと目の付くお菊、「申し〳〵御臺樣御らうじませ、堺の沖の方よりも、こなたへさして漕寄る船、造といひ帆のかけ樣、かはつた船ぢやござりませぬか」「げにも夫よ」と眞弓の方、倶に怪しむ彌三郎も、瞬千里波濤を凌ぐ、異國の大船足早み、程なく磯に寄る折から、祝部山上倫太夫、白馬を引かせ

出で來り、「今日殿下久吉公、當社明神へ御寄附の此馬、頻に嘶うて止む時なし。不審の餘り小製の、神輿を鞍の上に御し、鎭め祭れど彌增に、嘶く駒の吉凶知れず、御簾中の御目通り憚りある所なれど、異國退治の大統戎、晉成公の御代參と候へば、此由申上げんため、則馬も引かせたり」と、謹しんで訴ふれば、主從共に顏見合せ、俱に軻るゝ神慮の不思議。「イヤ其駒の嘶く吉凶、判斷なさん」と船中に聲高く、らつぱちやるめら路樂の響き、一劍腰に霜を佩ぶ、玉音淸く邊りを拂ひ、歩み出でたる異國の姿、「我は三韓とくねぎの城主、車騎將軍木曾官。傳へ聞く日本神國として、神は非禮の祭を請けず。近比久吉といふ英雄世に出で、天が下を治むといへども、禮樂政刑神明の心に叶はず、怒れる神の威德に撻たれ、扨こそ此馬嘶き止まず」と、忌憚らず述べたるは、もつての外に聞えたり。眞弓の方打笑み給ひ、「そも保元の亂より又百餘年の此年月、大方ならぬ四海の騷ぎ、切鎭めたる眞柴家の、武威をさみするそもじの詞、自は呑込まぬ」と、胸の一物見透す利發。彌三郎つゝと出で、「聞えた、彼晩唐の白樂天、日本の智慧を計らんと、渡つて來たる人眞似して、久吉公の軍立、軍慮の底を搜りに來たよな。眞柴の神兵程なく押寄せ、手並は汝が國で見せん。早本國に立歸り、首に名殘を惜んで置け」「ハ、、、、小がしこくも申したり。日本は僅小國の、小島に蔓る眞柴が智慧立、唐高麗を攻め

んとは、蚯蚓が天上望む不覺、及ばぬ事」と嘲笑へば、彌三郎ぐつとせき上げ、「アヤ毛唐人の癖として、腕なしの口がしこく、上をさみする慮外の一言、其腮切つて切りさけん」と、柄に手をかけ詰寄れば、御臺御聲かけ給ひ、「ヤレ待て彌三郎、土地の廣さをくらべては、四百餘州と六十餘州、對やうせざる小國なれど、日本は神の開きし御國、神力加はる軍配には、唐天竺にえぞしらぬ、蠻戎が加勢なすとても、叶はぬ事〳〵。神の擁護の眞柴勢、勝つか勝たぬか目の前に、勝負を爰に試みん。コレ此馬の右左、付けたる雙の染手綱、西は異國、東は日本、天照太神も女體なれば眞弓が代り、妙〳〵お菊手綱を取つて引く程ならば、神慮に任す卽座占、引き勝つ方ぞ勝軍。サア引き給へ木曾官、いそふれお菊」と奥方の、指圖はすぐに軍配智略、のつ引ならぬ木曾官、ふしようぐ〳〵に立寄れば、おもはゆながら主命に、是非なく菊が取る手綱。後に扣へる彌三郎、「コレ〳〵お菊大事の場所、必ず負て貰うまい。負けな〳〵」も惚れて居る、男のかけ聲千人力、其外家中の面々が、こなたに力めば磯には下官、互に臂を張りかけし、唐と日本の勝負附、賣つても見たき心地せり。「サア女」『唐人樣引かしやんせ」サア〳〵〳〵と木曾官、手綱を腕に身を入れて、引けどいつかな動かぬは、不思議と五體の力を入れ、引けどしやくれど四足をかため、地に生抜きし如くなり。お菊は吹出し、「ホ、、、、、家や羊の肉食に、穢れた腕

で神の馬、引き勝たうとはならぬ事。馬は斯うこそ引くものよ」と、じつかと取りし轡づら、引けば正直に引かれ寄る、波の鼓のかみ神樂、こゝに響きて尊みの、武威を守りの神德奇瑞、空恐ろしく尊けれ。「したり〳〵」と附々が、どよみを作る勝鬨に、木曾官顏色せき立ち、「ヤァどこへ神德、女のよれる髪筋には、大象も繫がるためし。よし〳〵それも無益の爭ひ、イデ異國の幻術奇特、目に物見せん」と手を拱き、口に唱ふる祕密の呪文、瞼は目前白波の、漲る海上三反ばかり、潮干潟と土砂捲上げ、平地とこそは成りにけり。下官ども聲揃へ「サァ〳〵ならば是して見よ、いんちんでいかうばとれい〳〵。唐が勝ぢや」と打笑ふ。眞弓の方ちつとも動ぜず、「南無や住吉大明神、汐滿干の力を加へ、日本の鋭氣を添へ給へ」と、一心こらす再拜祈念、空にはそれとしら鷺の、梢を離れ羽叩し、海に向つて飛ぶと見えしが、替りし水尾は忽に、もとの深海と返る波、音どう〳〵と漲れり。ハッと思はず木曾官、恐れをのゝき頭を下げ、「斯くあらんとは知つつれども、術を賴みに慮外の段々、恐ろし〳〵、御赦免あつて此以來、永く長門の臣下とならば、轍の魚の勺水に、命を延ぶる身の大慶、偏に簾中のお執成、宜しく賴み奉る」と、ほつきと折りし我慢の矢先、奥方御機嫌うるはしく、「懺悔に億劫の罪も亡ぶ、今より異國の邪術をやめ、神國不思議の威になびかば、いかでかいなみ給ふべき。け

ふの樣子を我夫へ、申上ぐるも歸國の上、重ねて逢はん韓國人、さらば」と直に引く弓の、眞弓の方は神垣に、賽の供揃へ、神馬は跡に山上が、手綱取りぐ〳〵木曾官、馬鳴も儕が來りたる、神の徵としら波や、磯折つ音も豐にて、戸ささぬ御代の三重盡しなき。

第二

豐前の國彥山と申すは、其麓豐後筑前の三國に跨り、九州無雙の高山にて、峯に上古の神在ましし、筑紫彥山權現と、山をば御名に呼子鳥、立木も古りて岩嶢たる、十の谷五十の窟、第一窟を御本社と、仰ぎ尊む神德の、靈驗四方にいちじるき。ウタさまにつげたや此枯柴と、やせてこがるゝ思ひの數を、諷ひつれたる柴苅が、聲せはしなき山戾り、鳥居の前に息杖立て、「ナント皆はどう思やる、此樣に汗水たらし、年が年中山働き、身を碎いても儲からぬ、此末はどう成ろぞい」「イヤさう案じた物ぢやない、今の殿下久吉樣は、元が奴の二合半、それがあの樣に立身して、六十餘州を取られたりや、誰が出世しよまいともいはれぬぞや」「ヲヽそれ〳〵、待てば甘露の日の本は取つたれど、又三韓を攻取るてゝ、能ある者は大名から欲しがるけな。物を書かぬ者といふか、大飯喰ふとか尋ねて來たら、鎗突かすまいものでもない。夫に付けて思

ひ出した。こちの村の六助、兵法がよいげなの。其上に力が強い。柴と云やこちらが五六荷を一荷に束ね、長濱まで日に五六度。其癖形に似ぬ孝行者、方々から抱へうといはしやつても、母親の傍離れるがいやぢやてゝ行かぬとは、きつい麁相の。此樣な働きせうより、百貫ましの侍商賣、おいらなら行のうにな。ヤたんと休んだ、サアいの」と、打連れ坂を下り行く。古木回岩雲に聳え、羊の腸の坂道も、平地と歩む六助が、柴荷をおろす鳥居前、木の葉つまんで乾手水、宮居遙に禮拜し、岩頭に腰打かけ、「ドラ一ぷく致さう」と煙かち〳〵吸ひかける、煙草のけぶり風に消え、空に知られぬ鳥一羽、はたりと落ちる膝の前、怪しと見れば諸翼を、矢に縫はれたる山鳩なり。「ハヽァしたり、獵夫のねらひ外れ、翅ばかりをとぢけるよな。六助が目にかゝりしは、運命いまだ盡きざる此鳥、放してやらん」と矢を拔けば、さも嬉しげに羽叩し、雲井遙に飛去つたり。「ハヽァ悅んで飛ぶはく。ヤ我等は宿に歸らう」と、荷を擔げんとする折から、半弓携へ岨陰より、二人の武士がうろ〳〵眼、六助を見て互に目くばせ、中に取込め、「ヤイ下郎め、うぬぢやな〳〵、殿のお鷹の餌に射た小鳥、何で矢を拔き放して遣つた。返答あらばぬかさう」と、切刃廻せば手を搢りもみ、「どなた樣か存ぜねど、御狩の鳥と存じたら、モ何しにか樣な不調法。只獵人の射損じと、何心なく右の仕合せ。下司の智慧は跡でのお詫、眞平御免下

され」と、詫ぶる弱みに猶付け込み、「ヤァならぬ〳〵。殿の御用をかゝした儕、館へ引立て糺明する」と、左右一度に引立つる、二人が手先をしつかと留め、「イヤモ幾度もお詫いふ、御了簡下されよ」と、放す手よりも引くはずみ、儕が力で尻餅突き、せきに赤面鍔打叩き、「ヤイ〳〵諸侍を投たぞよ、ヲヽ手向ひをひろいだな。下司に似合はぬ生兵法、ぶち放さん」と拔きうちの、刃先をひらりと又腕首、取られて骨も碎るばかり、「アイタ〳〵〳〵うぬこりやどうしをる、何と仕をる」「何とも致さぬ。お詫言聞分もなく刃物ざんまい、あなた方にお怪我がなうても、私が身に凶事あつては、宿に居ます獨の母、路頭にたちまち飢渴の難、跡の歎を推察下され、只幾重にも御堪忍」と、いひつゝぐつと一握り、手先しびれて取落す、白刃と五體山路に、どつさり二人が打返され、はふ〳〵起きて、アイタ〳〵としかみ頻、「エヽ〳〵重ねゞ〳〵投げたぞよ、弓矢八幡聞かない、と云ひたけれど、烏から起つた意趣だから、放生會だと思ひ助けてくれる。以來我々投た抔と沙汰致さば、赦ぬ程に覺えてをろ。サア榎竝一學殿」「イザ先早川兎毛殿、お互に御苦勞」と、負けてもさすが侍の、行儀崩さぬ兩人は、弓矢拾うて立歸る。六助は跡打眺め、「扨も〳〵こまつた衆達、ガ、アノ無得心な心もなくば、人の國を奪取り、合戰もしられまい。此身に怪我も恙なう、いぬるも彦山權現の、神の力」と伏拜み、「母者人が嘸待ちかね、ドリヤ歸

らうと著物の、塵打拂ふ後の方、「ヤレ暫く」と聲かけて威あつて猛き武士一人、傍近く威儀を正し、「某は當國の隷臣、名は轟傳五右衛門。イヤ〳〵苦しうない、お手上げられよ六助殿。武術力量兼備へ、九州無雙の譽れ高く、主人立花修理太夫、召抱へんと頻りの懇望、さるによつて先刻毛谷村に立越え、貴殿の宿所に至りし所、此山中にと承り、參りかゝつて今の樣子、恐れ入つたる貴殿の擧動、誠や千鈞の弩は鼷鼠の爲に其機をはなたず、相手ならざる相手に構はず、詞を卑下して無事を計る心の度量あつぱれ〳〵。今より我に伴つて、主人が館へ御入來下され、弓矢を補佐したまはらば、大悅ならん」と大身は、大身だけに身を吹かぬ、胸の器量ぞ奥床し。六助は氣の毒顏、「これは又きついおなぶりなされ樣、獨の母さへ養ひかね、漸小柴の荷ひ賣り、未熟な藝が御目に留り、面目次第もございませぬ。中々一つも武家方の、お役に立つべき者ならず、此儀は斷つて御用捨と、媚諂はぬ魂を、見込む程猶かうばしく、「サア〳〵德を包むは賢者のならひ、御尤とは存ずれども、夜光の玉は卞和が極め、貴殿の才器は見拔いた某、殊更近々異國攻、軍用士卒に事かゝねど、只乏しきは軍師の器量。拙者が詞承引あり、何卒御入來下さらば、虎に翼を添へたる幸、いかなる異國の大軍も、敗るにかたき事あるまじ。サヽ御用意」とせき立つれば、六助はむつと顏、「アヽ置かしやませいの、あたしつこい。何は扨置

き其合戰がマア不得心、手一合でも主取すりや、叶はぬ場所の命がけ、死んでは親を歎かす不孝、祿も知行も國郡も、親に見替へる寶はござらぬ。奉公する氣はつゆなし」と、けんもほろゝに取合はず。「フンすりや何と申してもや、ハテ是非もなし。其孝心をもつて君に忠義をなしむならば、王蠋季札が節烈にも、をさ〳〵劣ぬ國の寶、あたら文武の弓取を、招き得ざるも主人が不運、强ていはんも孝心を妨ぐる不遠慮、もしも老母百年の壽命を持ち、身を終られても有るならば、其の時他家の君にまみえず、必ずとも拙者にたより、主人がもとへ御入來下され。轟がけふの貴殿へ賴み、無下にし給ふ事なかれ」と、云捨てたつか弓取の、心は諸葛孔明を、草蘆に訪ひし玄德に、劣らぬ才智大國の、幅を見せたる家老職、山下をさして歩み行く。跡を眺め横手を打ち、「テモよき侍もあるものかな」と、感じ入り日の照りかへす、森の蔭より、「六助六助」と呼ぶ聲に、邊り見廻し、「フウおれを呼ぶは何所から」と見やる茅原かき分けて、誰としら髮の翁の姿、頭に烏帽子身に白張、杖にすがりて顯れて出で、さもやごとなき御聲にて、「いかに六助、萬石の祿を辭して一人の母を養ふ、孝心といひ義心といひ、慈悲正直を元とする、神の冥感淺からず。我は高良の神の使、此一卷は汝が好ける、劍術奥義を記せし祕卷、只今授與ふる間、家に歸つて開き見よ、四海を撫づる劍の威德、皆其中に有るべし」と、差出し給へ

ば押戴き、悦ぶ隙に神隱れ、翁は見えず成り給ふ。六助感涙肝にしみ、「チェ、有りがたし〳〵、日頃望みし此一卷、神より授け給はるとは、忝なし」と押戴き、心も空に飛ぶ鳥と、俱に我家に馳せ歸る。跡へ以前の二人の侍、「先生は何所におはす、先生々々」と呼ぶ聲に、かしこの方より件の翁、歩み出でたる目前に、兩手をつかへ謹んで、「御存念首尾よく達し、才力奇絶の六助に、印可を御傳授相濟んで恐悦至極」といふ聲押へ、「シィ音高し人や聞く。望足りぬる此上は急いで國に歸らん」と、烏帽子かなぐり身に纏ふ、白衣を脱げば神人と、見えし姿は一味齋、杖突く音も谺して、今一聲の郭公、待たねど暮れし山路を、本國さして歸りける。

第三

周に服せぬ頑民も、殷には忠の至れるをや。長門の太守郡音成、眞柴に引きし弓取も、時代に靡く武威強く、殊更今度三韓を攻伐つも君が御名代、家の眉目と一家中、賜はる酒の杯盤も、狼藉にまで賑はへり。けふ一日は下々に、御庭拜見赦さるゝ、白洲にどや〳〵立ち止り、「ナウ皆の衆、何所を見ても結構な事ぢやないか、お泉水の石一つでも、大まいの小判道具と沙汰聞いて、おらは魂消果てたはよ。お目出たなりやこそこんな所、長生すれば德得ますらよ」「チヽテ

ヤ、此お目出たの根を問へば、元が奴の久吉樣、打つては勝ち攻めては取り、亂を鎭め太平にさつしやつたは、きつい其身の大功ぢやてよノヨ、あなたを大功樣といふはヨ。其大功樣が唐を取ろてよノヨ、軍の名代此殿樣がさつしやります、重い役目を請取らしやつたも、運のお強い故でノヨ。それでけふのお目出た樣ぢや。廣い日本が取足らいで、唐までも取らうとは、武士の腹といふものは、分なものぢやないかいの」「ヲヽ扨あなたに限らず侍といふものは、よき敵と見りやあの首取りたい、よい國と見りやあの國取りたい、常住丁どこちとらが、女見た樣な氣持ぢや」と、仇口々に奥庭へ一群にこそ歩み行く。跡へ白洲へつょかつか、杖も樫木の房州と、二字をしるせし三度笠、立ちはだかつて見廻し〳〵、「テモとんだィ普請、何所もかしこも金物と箔づくめ、何の事ねい御門徒宗の佛壇を見る樣だ。大名にや何が成る、金のなる木も有るかい」と、羨しけに立つ折から、一間洩れ來る笛鼓、亂舞の調音も高し。「ハヽァ聞えた、けふは家中の無禮講、此別館で藝盡があると聞いたが、ヲヽそれだ〳〵。漸此頃治るともう早亂を忘れたほたへ。ィヽャそれも何の構はぬ事、是から奥のお庭廻り、拜見すべい」と遣水の、岸を傳ひに歩み行く。奥座敷にはもふ勢がいや〳〵とつと譽むる聲、鷹の間の襖開け、出づるお菊が舞の袖、汗拭ふやらあふぐやら、妓どもが寄りたかり、「ナウ千草、面白い事ぢやなかつたか。慶子の所作も

及ぶまい」「イヤもう〳〵及ばぬ段か、器量なら舞ぶりなら、天津少女の舞の袖、天人に見せて恂りがさして見たい。御臺樣にも殊ない御褒美。衣裝直すはわしらが役、そもじはそこで緩りつと、汗入れる間の咄し伽。情郎樣を今爰へ、おこすもわしら仲間から、そもじへ花の縫小袖」手々に持つて入りにける。夫としも、犯せる事はなけれども、戀には人目忍び足、一間を出づる彌三郎、見るよりこなたは飛立つばかり、「逢ひたかつた」と寄添へば、「コレ又邊の人目、忍ぶ戀路を見付けられ、どう云譯をする氣ぢや」と、呵られて涙ぐみ、「サア其逢ひ見るも常々は、堅い屋形のうち解けて、逢ふ夜まれなる七夕の、織女樣も此樣に、思ひこがれてござるかしらぬ。ふたりが中の彌三松を、生落したも四年前、姉樣のお世話になり、古う勤める友平が、里に預けて育つれど、それから後は奥樣の、御傍離れぬ奥勤、嘸可愛らしう成つて居よう、尋ねて居よう慕うて居よ。顔が見たやの思ひ子も、思ふ夫も他人向、我夫よとも我子とも、いはれぬ樣なあぢない、緣が世界に又あらうか。人目忍ぶの戀草も、日陰に枯れる身ならずば、假令虎臥す野邊なりと、親子三人居て見たい、思案してたべ彌三郎樣、わしや手枕の現にも、忘るゝ隙は」ないじやくり、譯もなみだにかきくどく。「ヲヽさう思やるも無理ならねど、儘にならぬが浮世のならひ、緣と月日はこゆるぎの、いそがば廻れ其内に、仕樣もやうも有ろぞいの」と、云ひつゝ

じつと引寄せて、雪の手先に柵みし、妹背わりなき折こそあれ、花に嵐の足音とん〳〵、驚くこなたはさあらぬ體、仲間一人白洲に踞ひ、「猿の眞似する小童を連れたる下郎、今日の御遊の折から、何卒悴が舞の一手、上々樣の上覽に入れたき望み、御門へ參り相願ひ候が、いかゞ計らひ申さん」と、伺へば彌三郎、「ホ、幸奥樣も入らせらるれば、一入のお慰、早く通せ」の下知を受け下部は御門へ走り行く。斯くと披露に付々が、數多傅き眞弓の方、座に著き給へば舞童、頓て御前に立出づる、五つばかりのうなゐ子が、髪も二葉の抓髷、抓からげの愛らしく、猿の面を氣さんじに、白洲にこそは走り込む。跡に付添ふ男が高聲、「コレ〳〵〳〵何ほ疊敷た樣なお庭でも、そない走つて躓たら、手々や膝ぼん摺むきましよ。ハイ〳〵ソ、、、御前ぢや〳〵、居しからしやれ」「ハア」と手を下げ踞ふ顏、一目見るよりお菊が惚り、ヤア友平か、預けたる子はそれかともゆふがほの、立寄らんにも御前の手前、差扣ゆれど大方は、上にもしろし召さるらん。下には男が杖しやに構へ、「ハイ廻らぬ舌で一寸申上げます。此猿めは生れ落ちるから、爺伯も母御もアヽイヤ、親猿のない正眞の木から落ちた、孤猿でござりますが、此小猿にたつた獨の伯母がござりまするが、此伯母猿がモウ〳〵〳〵、それは〳〵竝大體の世話ぢやござりませぬ。其でも親子の縁と申すものは、厚いものでござりまして、とゝ樣が見たい、かゝ樣が見たいと、

常住親をしたひます其いとしさ。今日は無禮講に多くの人の入込み、もし其中に能う似た人もござりましよかと、それ故ハイ〳〵、連れて參りました。只今舞はせまするも、たつた三日の稽古でござりますれば、不調法がちでござりますれど、首尾能く舞ひおほせましてござりませうなら、外に何にも望みまする儀はござりませぬが、御褒美には此猿めを、抱ておやりなされて下さりませ。サア〳〵猿殿、コレイナウ、さりとは〳〵きよろ〳〵した太夫では有るはいの。ガ又見たがるも無理ぢやない、親御は傍に有ながらハ、イヤ、ハヽヽヽヽ、母御によう似た伯母様が有るかてて、子供と云ふものはテモ扨も、扨も〳〵、扨も目出たの秋津洲や、こがね升にて米はかる、米はかる。ひんだの踊は面白や〳〵」「べいよ、かゝ様やとゝ様に似た、伯父様や伯母様はどれぢや」「コレ〳〵〳〵無理云ふまいぞ、舞うて仕舞うたら跡でべいがいうて聞かす。舞うたり〳〵。ウタよさの泊は何所ぢや、おらが内にて袖枕〳〵、乳房ふくめる親もなく、子も泣く、おらも泣く、なけど慕へど名のられぬ、名のられぬ、ひんだの踊は面白や」舞ひをさむれば、眞弓の方は御機嫌よく、「年はも行かぬ稚子に、教へも教へ舞ひも舞うたり。付きし男が言の葉に、かく竝んだる其中に、母によう似た伯母の有るとや。したふ子よりもしたはるゝ、親の心は嘸や嘸。ナウお菊彌三郎、そち達ふたりも今の間に、似合の縁の妻夫、設くるやゝの抱きならひ、抱い

て見るのもよからう」と、情の底意奥深く、入らせ給へば姚ども、「サアこれからがこちの世ぢや、其子爰へ」と緣の上、抱上げさせて取廻し、「色もくつきり、手や足の尋常さ。年はいくつ」「アイ、是程」と右の手の、指ひろぐれば、「五つか〳〵。そしてかゝ樣はどうしやつたぞ」「アイわしやかゝ樣もとゝ樣もない、よう似た伯母樣や、伯父樣を見せるてゝ、べいが爰へ連れて來た」「ヲ、可愛さうに孤か。こんな子產んだ母御なら、嘸器量よしと思はるゝ。能う似たと有るからは、わしであろがの」「イヤ」「そんならわしか」「イヤ」「そんならやつぱりわしであろ」「イヤ、おれがべゝと、アノ伯母樣のべゝと一つぢやによつて、外の伯母樣はいやぢや、アノ伯母樣に抱かれたい」と、いふも天然親子の緣、傍にかけ寄り抱付く。彌三郎も聲うるみ、「テモ利口な小猿め、抱いてやれよと奥樣も、お赦しの上誰が咎めう。親とまがへてしたふ其猿、心ゆかしにとつくりと、抱いてやられよお菊殿」と、いふは抱きたき百倍の、思ひも一つ兩の手に、菊が引寄せ引きしめて、わがみの樣なよい子をば、孤となし置く露の、たまに逢ひ見る顏だにも、親とも子とも名のられぬ、邊りの人目横障の、雲の隔てしうさつらさ、餘所にかこつぞいぢらしき。緣の下には友平が、浮む涙をすりこすり、「親の子を思ふ程、子は親を思はぬものとは、此子から見りや諺の間違ひ。どなたもお聞きなされて下さりませ、子細有つて其お子は、人目を包

む預り物、親御がないといふぢやなし、逢はせたうても見せたうても、儘ならぬ浮世のならひ、隱し育つる葛屋茸、場せまい住家の背戸門を、よその子供が母親や、爺親に手を引かれたり、抱かれて通りや、けなりがり、べいよ、おりやとゝ樣やかゝ樣はなぜない、とゝ樣に逢はせ、かゝ樣へ連れて行け、行きくされと、だゝける子を、漸すかして寢さすれば、現心にお袋と思ひ違へ、べいめが乳の山椒粒、抓んで見ては目を覺し、かゝ樣〳〵と、泣かしやる時のいぢらしさ。イヤモウ是を思へば親子の紲程、せつない、哀な、いぢらしいものはござりませぬ。是を思へば、釋迦如來樣が、浮世をいとひ捨つるには、女房持つなとおつしやつたとは、身にしみ〴〵と尊い教、親達の心の内も、ヲヽ推量して居りますはい〳〵〳〵。けふは殿樣のお目出たで、無禮講の御遊もあり、お庭拜見御免の噂、承つた嬉しさも、打通りではお庭ばかり、どうぞ爺御や母樣に似たお二方のお顏をつしりと、見せたいていの思ひ付が、枕を割つた猿の舞。其覺えのよさとした事が、たつた三日で、お聞きなさいたつた三日、モ僅な日數で覺えさしやつたも、器用でも利發でもなく、おとゝ樣やかゝ樣に、ぢやない似たお人に、逢ひたいと思ふあの子の一念。眞實の子の樣に思うて、抱いてやつて下さりませ。コレぼん、日頃夜も晝もこがれさしやつた程、とつくりと抱いて貰はつしやれ」と、いふも眞身の友平が、せつなき咄傍に聞く

妙どもも諸共に、思ひやつたる貰ひ泣、涙もろきは女かや。一間の内より彌三左衛門、奥方の賜手に捧げ、しづ〳〵と歩み出で、「彌三郎、殿に召さるゝ御用ぞあらん、行け〳〵。お菊殿もいづれも奥へ」と、嚴しき父の一言に、底氣味悪く彌三郎、其場を立てば一同に、皆打連れて入りにける。彌三左衛門持出でし、臺の物縁に差置き、「緋縮緬五卷金子の包、稚き者へ下さる、有りがたう頂戴せよ。ドレ小兒爰へ」と膝近く、「そちが名は何と云ふ」「アイ彌三松」「ナニ彌三松とな。デ顔見せい。フン額のかゝり、目の張は爺親めに生寫し、瓜實顔は母に其儘、テモ能う似たなあとサ、誠の祖父が傍に居ば、嘸斯くいふで有らうもの。殿のお影で祖父祖母も、親も出るには供に供。それに引きかへみすぼらしい、まめな可愛顔見たりや、嬉しうて恨めしかろ。寡では果さぬ躰や娘、思ひ初めたら初めた時、親へ打明け云ひをつたら、表向から三々九度、可愛い孫を世間晴、抱いて眺めて樂むはい。」ハ、、、我子か孫でもある樣に。ヤそな男、秋に音する萩の葉も、おのが身からは音せねど、風がわやくでナ、わやくいはうと見たがろと、逢ひつ見させつする程は、餘人の目にもよく見ゆる、さすれば孫子が不便でも、云ひまげられぬお家の掟、大事に掛けて連れ歸れ。身も歸らう」と弓取も、迷ふは血脈稚子を、連れて二人は打しをれ、俱に我家に歸りける。お菊は恩愛稚子を、今一目見たき間の戸を、開けて立出る後より、伺

ひ居りし京極内匠「コレ〳〵お菊殿、出來ますの〳〵」「ヲ、内匠樣何ぢややら、出來ますとは何がいな」「コリヤ又きついお隱し。こつそりと子まで設け、イヤモ舅殿の粹さ、當世〳〵。花も恥ぢらふあてやかさ、引手數多は元より推察。ガ戀は心の外々に、何ほ男があろと儘よさ。日外ふつと見初めてから、思ひに痩せた此京極、叶へてほしい」と抱付く手先、漸に拂ひ退け、「エヽめつさうな事ばつかり。ざれに事かき役柄の、重き身ながら不義徒、事顯はるれば身の上に」「ヲヽ、成るの合點。惚れかゝつたら金輪際、くどいて〳〵くどき拔く、扶持も知行も塵芥、おうとさへいや連立つて此所をほい、都へなりと東へなりと、立退く思案、内匠が心底、何と憎うはあるまいが」と、立寄る折から一味齋、そぶりは見れどさあらぬ體、「ヤイ娘、そちや何用で是に居る。年わかき女の端近、惡名請くるもとゐと知らぬか。行け〳〵」と追ひやつて、「ナニ京極氏、貴殿と我は殿の御師範、國に二人の劍術と、人に知られし身の放埒、人なき折を幸に、御異見申す、止りめされ」「コリヤ老人の深切至極、忝い。ガ聞く氣ござらぬ、いやでござる。さうお手前が知る上は、もう隱さぬ〳〵、貰ひたい。イヤサ息女お菊を我妻に申請けたい。吉岡殿」「ヤアだまり召され。拵を紊つて色に溺れ、法に背きし今の一言、上意に達せば明日をも知れず、腹切る御邊に連添はす、娘は吉岡持合はさぬ」「スリヤ承引はどうあつてもや」「ハテしれた

事を。麒麟の子を鼠が念がけ、妻に仕たがる望事、叶はぬ限り」と苦笑ひ、襖引立て入りければ「ヲヽ承引せねばうぬが首、娘に添へて請取る」と、かけ行く京極、かけ出る藤藏、「マヽヽヽお待ちなされ先生、樣子は小蔭で承つた。御立腹は尤なれど、今先生が手を出されては、戀の意趣討人聞惡し。恨を晴す趣方はの、コレかう〳〵」と耳に口。「フン實に尤、きやつと御前の試合を望み、ぶちすゑた上てつぺい押」「サ、手に入るお菊はお前の奧樣、一家となれば恨はさらり、こつが斯うして行かぬ時は、仕樣もやうも又樣々。せく所ではござらぬ」と武士の道より內心の、邪智に勝れた兩人は、點頭き伴ひ入る跡へ、又これ老いて矍鑠たる、投化の夷人木曾官、何かしら木の箱物を、手に携へて入來れば、「ソリヤ唐人が來たけな」と、追々出て來る妓ども、物見高いは常なれや。木曾官立向ひ、「いゝきいちんたんやあこうはん、いつゐつしてさいたくとうらい、しいらい〳〵」とこそいひいるゝ。妓どもは顏見合せ、「ホヽヽヽヽ久しい物ぢやが、アリヤ何といふ經ぢやいなう」「ヲヽあれこそ本のちんぷんかん、譯は知らねど推量が、器量のよい同士此樣に、竝んで居るを唐土の、おだて文句で有るまいか」「イヤ〳〵〳〵、もしもあれが物申といふ、案內詞の唐樣なら、聞流しては越度の基。マア〳〵御前へ此通り」と、案內に連れて一間より、月の眞弓のにほやかに、立出で給ふ御姿、見るよりハツと低頭平身、恐

れ入つて蹲れば、奥方斜に見やり給ひ、「ホヲ過ぎし頃長居の浦邊にて、初めて目見えし三韓人、まめやかな體悅ばし」と、仰の下に額をもたげ、「誠に其節願ひしごとく、異國攻伐の統戎たる、音成公の武德をしたひ、歸降を望む木曾官、一度相見し機緣をば捨てられず、宜しく御披露下されば、味方に先驅け異國の案内、あつぱれ三韓八道を、御手に入れんは瞬く内。則是こそ彼國の、山河を縮め畫し地理の圖、拜謁の印として御覽に備へ奉る」と、件の箱物恭しく廣緣に差置けば、「ヲ、夫こそ我夫かねてより、望み給ひし韓の繪圖。それ〳〵此由申せよ」と、宣ふ聲の内よりも、「聞いた〳〵」と太守音成、悠々と褥に坐し、「誠や蕭何相府に地理の圖をとらずんば、子房賢しといへども計略成らじ。いしくも手に入る此一卷、とてもの望木曾官、猶もくはしく物語り、聞かしてんや」と有りければ、ハツと領掌庭上に、目に見るごとく述べにける。「先日本は五畿七道、我三韓は八道にて、全羅慶尙京畿道、是は日本の五畿内にて、帝の在す都なり、其外うるさんとくねぎ城、船のかゝるは釜山海、味方の船を爰にとどめ、手いたく攻入る程ならば、久しく治まる世に馴れて、戰ひ不得手の三韓勢、立つ足もなくちり〴〵に、逃ぐるを射止め搦捕り、首の代りに切る耳を、御大將へ御土產に、上ぐる勝鬨勝軍、只手の内に候」と、申上ぐれば音成夫婦、「實にいさましき物語、奇なる畫工の手際や」

と、目枯もやらず見る折から、かたへに忍ぶ以前の道者、しげみを這出で地理の圖を、こはぐ〳〵そつと差覗き、我を忘れて高笑ひ、「ヤレ〳〵」をかしや、此繪はきつくわいな嘘八百、此樣な物を持て來て抱へられうとは、ハヽヽヽ太い仕事」と嘲笑ふ。木曾官大に怒り、「ヤア大切の圖をさみする曲者、うぬは何やつ何國の匹夫」「ヤモ何所の者とて身はしれた關東者、先年堺の小西へ行つて、誠の韓の地理の圖見た。コレ此繪圖は山を川、難所を平地とまつかいさま、不審の晴れぬ捧げ物、皆樣油斷遊ばすな」と、云ひも切らせず木曾官、せき立、佩劍扨く手も見せず、只まつ二つと切付くる、白刃を杖にて丁ど受止め、「其手ぢやちつと行かない」と、刎ねれば付け入る二人が爭ひ、近習が聲々、「殿さまのお目通り、しづまれよ」と制すれども、聞かずひるまず戰ふ有樣、音成怒つて、「ヤア誰かある、我が見る前とも憚らず、兵刃を振ふ不敵の兩人、搦捕つて引きするよ」と、下知にかけ來る吉岡京極、「御上意なり」と大音に、肝取りひしぐ武の威光、夷は内匠が手に搦め、道者はつひに一味齋、くゝし上げたる其折から、「久吉公の御成」と、白洲に入來る究竟の武士、手に捧げたる太刀一腰、恭しく座に通り、「某儀は久吉の郎等櫻井新吾、此太刀、先君春永在世の時、片時離さず帶せられし、蛙丸と名付けし尤物、君を弑せし明智が叛逆、本能寺の大變聞えしは、此地に軍をいどむ陣中、當家の大軍虛に乘つ

て後を討たば、山崎の一戰難かるべきに、安々明智を討ちし事、偏に和睦を承引ありし、音成公の情によれり。高義を謝する此一品、けふのお成の土產として、進上の御事なり」と、使者は云捨て座を下る。音成謹しんで太刀押戴き、「コハ有りがたき御賜、家の面目此上や候はん。シテ〳〵御大將は」「ホヽヲ眞柴大領久吉、それへ行きて對面せん」と、思ひがけなき件の道者、繩引ほどき笠かなぐり、忽替る貴人の勿體、衣服改め寛然と、設けの席に座し給ひ、「誠や久吉、愛智郡の土民に產れ、今日本を併呑し、武將と成るまで其間、草履取より押上り、柴田が肩の按摩取、賤が手業の種々樣々、せざる辛苦もなかりしかど、繩かゝつて見しは初めて。運盡き擒となる族、嘸口惜しく思ふらん、ハヽヽヽ。さるにても一味齋、我を捕へて高手小手、くくし上げんと思ひの外、繩を纏ひしばかりにて、小手をゆるせし所存を聞かん」「ハヽッ恐れ入つたる君の御諚意、貴き事天子につゞき、富四海をたもたせ給ふ、君とは存じよらねども、胸に徹する貴人の相好、繩とる腕もしびるゝばかり」「フウそれ故小手をゆるせしとな、面白し。ナニ京極內匠とやら、そやつ異國の紛れ者、尋問ふべき子細あれども、なか〳〵一應再應では、白狀すまじき頰、魂、刃物を奪ひ桎梏を嚴しくし、獄屋に繫ぎ置くべし」と、上意に猶豫なは付を、引立て〳〵入りにける。太守重ねて威儀を正し、「數ならぬ愚臣が茅亭、御沓を入れられ

下さる事、大悅此上や候はん。麁末ながら奥殿にて、一獻すゝめ奉らん、渡御なし下し置かるべし」と申上ぐれば御大將、「ホ、淺からぬ深切、辭するは無禮。然らば其意に任せん」と、仰嬉しく奥方も、御案内とて諸共に、座を立ち給ふ其所へ、衣川彌三郎あわたゞしく罷出で、「三韓の木曾官、獄屋に繫ぎこれ有る所、いかなる術をかなしたりけん、縲紲の繩目も脱け、眞弓の方の守り刀、奪取つて行方知れず。申譯の爲切腹御赦免下さるべし」と、願へば音成顔色變じ、御大將の御氣色を、はかりかねたる色目を察し、「衣川とやら、小氣なる若者、曲者一人逃せしとて、腹切らんとは犬死々々。侏離鳥言の夷貊のわざくれ、遁れ去るとて何事をかなし得ん、聊心を勞すにたらず。今死する身を生きながらへ、三韓攻の軍中に、明兵數百の首切かけ、異國に揚る譽をもつて、けふの過償はんとは思はずや」と、人を殺さぬ寛仁大度、胸は江河のはかりなく、滔々としている弓の、矢に似ずゆがむ心より、心苦しき京極内匠、白紙に包む願書を、緣に差置き平伏せば、音成手に取り逐一披見し、「ナニ内匠、此願書は一味齋と試合の勝負が望みとな、善からぬ願ひ、一方勝たば一方は負けたる恥辱、音成が領地に足は留め難からん。三韓征伐近きに有れば、武士一人も惜しき時節、これを計つて此願ひは取上げぬ、差控へよ」「ハッ御意を返すは恐れながら、勝負は時の運による、手强き相手を乞望むも藝道の勵み、

第一は、軈て異國の戰場に敵を引請けかけ惱ます、腕だめしとも存ずれば、何卒御免下さるべし」と、猶押返す下心、邪智とは知れどさあらぬ音成、「フン一理ある申條、然らば一味齋を是へよべ」ハッと近習が主命に、座を立つて行く程もなく、劍は一人に敵する極意、胸に甘なふ一味齋、しづ〳〵御前に伺候する。「ホヽヲ早速の入來大儀、召寄せし事別儀に非ず、則夫なる京極内匠、其方と試合を望み、差とむれども是非との願ひ、老體といひ苦勞なるべきが、いなまず汝立合はんや」「コハ有りがたき慈愛のお詞、老いさらぼうては候へども、打物取つては百萬の强敵も、秋野にすだく蟲とも存ぜず。御上意でござらうならば」「ムウ辭退せず立合はんとな。然らば兩人試合を許す。殊には殿下御座の間近し、よく致せよ」ハッというよも我慢の内匠、肩衣刎ねかけ、「サア一味齋、御免の出た試合の勝負、急ぎ支度を致されい」「イヤ〳〵劍法は汕斷を敵とす、試合を常、常を試合の場とするが八重垣流の心の取方。スハ立合といふになり、ことゞ〳〵しき支度立、不意に敵はなきものかは。ハヽヽヽ」と、早勝色を顯はせし、木太刀を菊が持出でて、直すも父の利運をば、弓矢神への心の祈誓。其外茶の間仲居まで、傍に居流れ勝負を、皆「吉岡の親父樣、勝つてもらを」も常からの、實な氣はひを請けて居る、最屓連中と知られけり。「イザ參らう」と兩人は、作法の式禮、太刀の傍、寄るより早く立別れ、

ヤァ〳〵〳〵と互のかけ聲、内匠いらつて打込む太刀、心得たりと請流し、又打ちかゝる一味齋、京極透さず身をかはし、付入り付込む上段下段、時移るまで打合ひしが、何とかしけん一味齋、太刀筋弱つてたぢ〳〵〳〵。「勝負は見えた一味齋、あつぱれ見事」と音成の、賞美の詞に一味齋、ハツと其儘平伏す。傍に内匠が不興顔、「コハいぶかしき殿の御上意、眼前見えたる試合の勝負、拙者負とは其意得ず」と、いふをいはせず、「ヤオレ京極、今の試合を勝と思ふか。其身に纏ふ衣服を見よ、二太刀めには左の紋、四太刀めには右の紋、一味齋が打つたる笄、眼に當らば瞽とならん、咽を打たれば卽座の最期、死骸と成つても戰ふか」と、理非明白の判斷に、ぐつともすつとも京極が、拳を握り無念の思ひ。音成重ねて、「ホヽ惜むべし一味齋、今少し年若くば、三韓攻に一方の大將ともなさんず器量、ヘエヽ殘念々々。當座の褒美一千石、汝に與へ遣はす所、相違なき條譽をば、子々孫々に傳ふべし。ヤイ内匠、今の恥辱に音成が、勝負をとゞめし所存の底意、一々思ひ當りつらん。過つて改むるに憚らず、以來晝夜に勵を加へ、軍馬の前の忠節こそ、此上ながら肝要」と優美の詞諸共に、下る御簾は一面の、青雲とこそ隔てけり。跡見送つて一味齋、忘れがたきは主君の重恩、エヽ忝しと三拜し、「イヤナニ京極殿、只今は不調法。ヤモ闇の筒先まぐれ當り、必心にさへられな。後刻御意をば」えいぐわの花、藝に

咲かせて立歸る。跡に無念と京極が、胸はむしやくしや眉に皺。奥よりさし足藤藏が、傍に立寄り、「コレサ先生、今更何の思案顔、重々憎き一味齋、ぶつ放して遺恨を晴すが一番近道上分別」「シイ音高し壁に耳、きやつも討ちたしお菊もほしょ。フ、斯うつ」と、巧む心の奥の間は、又も御遊の亂舞の響き、庭に二人がしめし合ふ、武士の性根の亂拍子、打連れ奥へ、入相の、遠山寺の鐘の音も、花に心をおく御殿、木々の梢に風斷えて、草もゆるがぬ廣緣先、小山のごとき磐石にて、造立てたる手水鉢、ゆるぐと見えしが引かつぎ、顯れ出づる木曾官、おどろの白髪三千丈、髭ぼう〳〵と眼の光、星と輝くその有樣、奥を目がけて歩み行く。上段の間に銀燭臺、點し立てたる中央に、飾り置きしは紛ひなき、小田の重寶蛙丸、「してやつたり」と立寄つて、拔けば新刀の次刀、飾り置きしは謀計もや。「エあらふと儘」と細瑾に、構はぬ不敵投げはふり、「今度はゆるす久吉音成、不日に來つて頭を取らん、待つてをらう」も獨言、のつか〳〵と行く先に、道を遮る茅の穗先、「シャこしやくにも巧みし」と、見返る跡も鏈襖、取卷く逞兵嘲笑ひ、「ハ、、、しやらくさき蚊蜻蛉めら、苧莖にひとしきへろ〳〵鎗、我鐵身に立つべきか」と、手を拱いて幻術の祕文、唱ふる聲と突かくる、鏈は一度に折れ飛んだり。驚きながら屈せぬめん〳〵、組んでとらんと柄を投捨て、かょるを捻首腕引きぬき、一

度にかゝれば人礫、摑んで庭の立石に、打付けられてひつしやゝ、群る蜘と碎け死に、さしもの多勢溜り得ず、さつと一度に引退く。「ハ、、、追はぬ敵に迯べらゝ。ヤア隙入や」と、ゆふ闇に、人なき野邊を行く如く、歩むこなたの一間より、「曲者待て」と高んらか、胸にぎつくりこたへしが、打捨て猶も出行くを、「ィヤサ、三韓の降將木曾官とは僞り、先年小田の天下を掠め、山崎に亡びし明智が賊黨、四方田但馬守、とどまれやつ」と肝先に、鳴る雷と應ゆる大音、さしもの强勢百練の、鎖に足を繫ぐが如く、覺えずしらずたぢゝゝ、はせ戻つて檻外にぐつと詰めかけ、「異國に生立つ木曾官、明智が殘黨なんどとは奇怪至極」と、いはせも立てず、「いふな但馬、酒を盜む者は色に顯れ、香を盜む者は香に顯る。山崎合戰の大崩に、岸田が一矢射削つたる、矢疵の跡は左の高顴。四方田と呼びかけしを、我名にあらで見返るべしや。討死せしと披露させ、其身は異國に年積り、不日に三韓征伐と、聞くと等しく此地に渡海し、山を川、嶮岨を平地と欺く地理の圖、日本の大軍悉く異國の難所におびきいれ、屢とせん計策とは、見拔いた推量違ふまじ。子房諸葛は欺くとも、此久吉を謀らん事、及ばぬ巧」と大やうなり。「ホヽヲ遁の久吉あつぱれ眼力。が明智天下を掠めしと、我を唱へて賊徒となす、汝が身の上知るや猿冠者。春永甲州退治の折から、快川國師を燒殺し、種々の惡政見るに忍びず、主人光秀數度

の諫言、用ひぬのみか鐵骨の、扇に額をぶたれし恨み、本能寺にて亡せしは、武に逞しき弓矢の本懷。汝却て春永の大恩を蒙れども、其主の子を幕下に屬け、小田の天下を横取する、國賊とは儕が事、其下に働く大名めら、手下とやいはん同類とやいふべき、儕々が分に應じ國郡の分取。盜人原の大將久吉、人を稱へて賊となし、盜賊の成敗せば、うぬが首からまづ刎ねよ」「ハヽヽヽ、偃鼠能く水飲めども滿腹に止る、小さき眼にさこそ思はん。先君不慮の落命より、時日を移さず仇を討ち、民を案んじ王位を守護す。春雄春信其德なければ、是非なく國家を治むる久吉、汝ごときが知る事ならず」「ヤア多言なり久吉、謀は汝に負くるとも、異國に得たる我帶劍、切味見せん」と飛びかゝるを、はつたとにらむ大將の、天性御目に重の瞳子、尖き武威に蹴おされて、五體すくばり無念の齒がみ。大將面色なほらせ給ひ、「ヤヲレ但馬、嚴顏蜀に降つて英雄の名を失はず、心を改め從はゞ、命を助け召遣はん、サ仕へんや四方田」と、仰の左右に取卷く勇兵、「サア猶豫せば火蓋を切らん、何と〳〵」と詰めかくる。さしもの但馬惡びれず、諸肌くつろげ物をもいはず、腹へぐつと突立つれば、首を搔かんと立寄る兵士、車輪とにらむ怒りの大音、「ヤアじたばたと騷がしい。日本無雙の四方田、うぬらに取らるゝ首は持たぬ」と、罵る强勢、優美の大將、いう〳〵と階下におり立ち、疵口とつくと、「見事なり、四方田」と、やゝ感賞の御

詞。音成一間を立出でて、「先刻よりかしこに在つて、樣子具さに承はる、本能寺の大變より紛失したる蛙丸、君が賢慮を廻らされ、贋を誠としはうでん、おびき寄せたる其甲斐なく、彼も所持せぬ此上は」「イヤサ異國は知らず、日本は此久吉が下知の下、深山幽谷に藏すとも、手に入れん事案の内、氣遣ひせられそ郡氏。只々をしきは四方田、あたら勇士」と仁惠の、一言五臟にこたへけん、「チエ、忝き情の一言、最早此世を辭する某、先刻内匠がかけたる縄目、脫出でしは搦人の失なりと、嘸心外に存ずべし。我が皺首の介錯を、彼に御下知下さば、末期の志願此上なし」と、餘儀なく見ゆれば御大將、「ホ、心ある願ひ聞屆けた。ナニ内匠はなきか」ハッと奥よりかけ出る京極、遙こなたに手をつけば、「イヤ京極別儀でない。汝が介錯望む但馬、聞き得て遣す、仕てとらせい。事足んぬれば歸らん」と、御一言も嚴々たる、智仁勇備の名將に、隨ふ郡、音成も、御見送りの威儀清く、本陣さして歸らるゝ。跡に手負は傍りを見廻し、「ナニ京極殿、今はの際の某が、一言いひたき子細有り。近う〳〵」と聲をひそめ、「誠や往事渺茫たり、明智に數多仕ふる中、わきて股肱と賴まれし、此四方田但馬守、年老いたれども百萬の、敵は蠅とも思はねども、運をはかつて今日只今、覺悟の自害も時刻を延し、賴み置きたき子細といつぱ、マヽ先尋ねん。貴殿稚き時の名は秀丸とはいはざりしや」「ヤこいつ血迷ひしな。我が

出生は備前の小島、父は京極新左衞門」「イヤ〳〵左にては有るまじ。兩目は岩下の電にひとしく、額に一つの喜怒骨は、光秀公の忘れがたみ、親子とて能く似られし、ヤモ健氣にも生立たれしな。其骨柄にて仇をねらはど、やはか仕損じ有るべからず」「ヤア種々の戯言、叶はぬ謀叛我に讓り、逆徒明智が類葉抔と、筋なき汚名を蒙らせ、我が三族を絶す所存か」「義に當つては三族を、絶すも天に叶ふ孝行。能く聞き給へ一昔、春永亡びし其時は、天が下知る惟任將軍。いたはしや光秀公、山崎の一戰大崩れとなりしかば、憂き近江路に落下り、再び義兵の旗上に、けふの恥辱をはらさんと、心はやたけの藪づたひ、闇はあやなき小栗栖村、物の具剝がんと土民めら、ひつそぎ竹鑓猪突鑓、運のつき出す鑓先に、弓手の脇腹ずつぱと突かれ、さしも強氣の明智殿、急所の疵に目もくらみ、深田にがはとをちこちの、土に武名を埋まれし、無念は修羅の妄執を、晴す所存はござらぬか」と、謀叛の血筋を請繼がす、謀も耳に空吹く風。「返答なきは承引はござらぬの。チエヽ是非もなし、承引なしとて此儘置かうか。一念忠義に凝つたる魂魄、こなたの皮肉に分入つて、籏上させで置くべきや。南無や幻法守護神帝、但馬が五體を此まゝに、神にさゝぐるちかひの牲、日本六十六ヶ國、再び明智の有となさん、我忠誠を感應あり、玄鑑あやまつ事なかれ。ぜんすまるや、さんたまる。はらいそ〳〵」「ヤア細言吐かすと

くたばれ」と、なぐり情もしら髪首、只一討に刎ねてげり。「サアこれからおらが身の片付け、試合にまんまと負けたれば、此地に足は留められぬ。お菊を連れて「江落の、工面は豫て胸工み、但馬が持ちし御臺の刀、後日の用に立ちながら、死骸を蹴やり出行く先、道を遮り彌三郎、「ヤア何所へ京極、御臺所の守り刀、奪ひ立退く不敵者、こつちへ渡せ」と、詰寄つたり。「ナニ小僧めがびくしやくと、主に隙やり出て行く内匠、逢ひたう思うた戀の仇、ようも先陣ひろいだな。一味齋めもぶち殺し、お菊を女房に持つこんたん、まづ儕から片付けん、覺悟ひろげ」とつゝ立つたり。「ヤア重々につくき人非人、者ども來れ」と彌三郎が、下知に群る數多の家來、屈せぬ内匠が手だれの刃先、右へさゝへ弓手に當り、打てど拂へど叶はどこそ、危きうしろに冥々と、顯れ出づる但馬が姿、猶も閻浮の幻の術。家來は夢か現のごとく、打付け投付けなやませしは、手鞠を突くに異ならず。死靈の助に京極が、虎口を遁れ門の外、出づる我身も我ながら、怪しと見返る塀の上、すつくと立つたる但馬が姿、早立去れと幽魂の、指ざす方は廣小路、冥火に照す道筋を、いづくとも無く 三重成りにけり。

第四

元是大内義隆が國衙も、今は中國の手に屬したる周防の國、今度太守の祈願とて、新に建つる石清水、正八幡の宮殿も、日追つて成就すめる代に、いとど神威や增しぬらん。煙草の休み大工ども、一つ所へ寄集り、「ナント此度のお宮普請、本社から拜殿神樂堂、繪馬堂までが恰好よう出來たではないか。他國は知らず此國に、こんなお宮は外にや有るまい。ナウ藤七」「チイ喜助がいふ通り、こちとらが手の離るゝも大方翌の日一ぱい。スリヤ御遷宮も近い内。其時は嘸賑はしからうなう」「ヲ、サ、そこはぬからぬ此文藏、思ひ付いた趣向が有る。マア一番に眞赤な猩々緋の幟、其次に揃への挑燈。えいか、揃への浴衣で揃への人に夫を持たす。えいか、喜助は足が長短ぢやといふによつて、引く物によるといふ題で三味せん方。えいか、藤七は鼻がえらいによつて、馬によるといふ題で、太鼓の役、音頭は今度大阪から下つて居やる醫者殿に習うた通り、おれが跡からやつて行くぢや」「待ちや〳〵文藏、其上方から下つて居る醫者殿とは、どの醫者殿ぢや」「ソレイノ、眉毛は黑毛の刷毛見る樣で、目はぐる〳〵と悉皆達磨」「ムヽ成程〳〵、アノ柴左仙が事か」「ソレ〳〵、其人に習うた音頭の妙音、ちつとばかり聞か

したけれど、又意地悪の春風殿、モッ追付け來る時分、見付けられたら目を貰ふ、一働きして跡の事。サァこい〳〵」と打連れて、普請場さして行く處へ、ひよこ〳〵來たる在所醫者、顔見合せて、「ホ、左仙樣、けふは何所へござましたの」「ヤァ何所へとておれが事、宮寺の連歌俳諧、繪馬もほつとり見あいて仕舞ひ、つくねんとして居た所へ、此お宮の普請奉行、一味齋樣から呼びに來て、將棊の相手に今まで成つて居た。そしてアノ音頭はとつくりかたまつたかの」「アイ大方に覺えました。爰仕舞うたら夕ざりに、又稽古に參りましよ。後に〳〵」と雙方が、すれ違ひさま當りしか、何とかしけん、柴左仙、うんとばかりに倒れ伏す。惚り動顚三人が、「ヤァ〳〵コリヤ目がまうたか」とうろたへ眼、池水兩手にそゝぎかけ、「コレ〳〵醫者殿いなう、左仙殿いなう。左仙樣、不動樣、ぢやない、お醫者樣いなう」と、呼ぶ聲耳に通じけん、軒端を傳ふさゝがにの、糸より細き、聲音にて、「ア、扨はかなき世の中や。昨日までもけふまでも、醫者よ藥師と敬はれ、餘所の病と詠めしが、けふは我身に迫り來て、犬猫の子か何ぞの樣に、小屋の軒場に倒るゝとも、誰か哀れと見給ふらん」「さりとは〳〵氣の弱い、めつたに死んでよいものかいなう」「めつたにこなたは死にやさんせ〳〵」「左樣々々」と抱きしむれば、「イヤナウ方々、おりやどうしても叶ふまい〳〵」「トハ又なぜに」「ヲ、一通り

聞いてたべ、蜜柑の皮の色づくと、藪醫の顔の青なるは一時と、誰がしにせて冬枯の、療治は隙なり金はなし、内證とても曾我殿の、五りやう十りやうの煙草さへ、錢に盡きたるつがずがち、おのづと悪い顔色を、吉岡殿の下部が見て、氣色が悪か是なりと、たべよとくれた竹の皮、中には黒い一かたまり。扨はきやつめは耆婆扁鵲、おれが常から持料の甘い物好く癪の蟲、能くも知つたり醫者まさり、是黒砂糖なんめりと、何の差別もめつた喰、呑込んだれば、ナウ悲しや、黒砂糖ではなうて、コレ泥川の陀羅介で有つたはいの。コレ山上參りの土産にする陀羅介で有つたはいの。それが毒ではなけれども、痩馬ならぬ痩體、苦過ぎたのが此身の害。アイタ〳〵〳〵、アヽ痛やなう、苦やなう。コレ此腹の痛さでは、どうで命がつゞくまい。八萬地獄へ落つるとも、日頃近しう仕たそなた、後から死んでござるのが、五年十年おくりやうとも、必ず死出の山、地獄の釜端で待つて居てやるぞいの」と、聲も哀れなしやくり泣。

「アヽコレ〳〵〳〵〳〵、さりとては〳〵〳〵、爰で死なしやるとの、マア掛り合ひに成るといひ、第一地獄の釜端で、待つて貰ふがおりや術ない。コレ氣から先へ死なさずと、分別がある聞かしやれや。こなた平生踊好、常々おれが習うて置いた、音頭をやつて見る程に、拍子にかゝつて歩行いたら、コレあるけさうなものぢやぞ」「フン、コリヤ一理窟、石積んだ地車も、木やりの

聲で行く道理、マアちよつと一口試みに」「ヲ、サ合點」と破扇、腰から出してふりかざし、オンド「ヤレ阿波の海賊彼の十郎兵衛が、ソレサアハリサア」「ヤア〳〵こいつはえらいわいえらいわい、ヲヽ俄にしよぎ〳〵氣が成つた、猶も大工殿頼みでござる」オンド「ヤア哀なるかな此醫者殿は、ハリサヤヨイサ、砂糖代りに陀羅介のまれ、あせりもがいてはらいたはしや。ヨウイヨウイヨイヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ハアヨウイトナア」うかれ打連れ立歸る、跡は渚に白波の音もどうだで立出づる、普請奉行の役柄も、格もよし岡一味齋、名のみやさしき春風が、共にかしこに立止り、「誠に此度の御宮普請、相役と申すは名ばかり、皆其元樣のお助け故、斯樣な大役首尾能く相勤めしは、いかばかりか大慶至極」「コレハ又痛み入つた御挨拶」「イヤイヤ神以て御恩に著ます。夫に付き先生へいつぞはお詫び申さうと存じたに、願うてもなき幸、定めて拙者を人畜の樣に思し召すでござらうと、存じ廻せば面目ない、アノ人非人の京極め、あゝいふ族と露しらず、只管の招によつて、思はず入門致せしは今での後悔、若輩者の跡先に心も付かず、破門致せし其段は、幾重にも御了簡、此上はぶつてなりとも腹をいて、以前の通りお弟子と成して下さらば、此上の悦びなし。コレサ〳〵、先生偏に願ひ奉る」と、詞に油乘せて見る、艶とは知れど一味齋、「イヤモ誤つて改むるに憚りなし、元高弟の其元なれば、末々の門人へ、稽

古の席の差配り、此方よりもお頼み申す」「スリャお聞屆け下されうか、ハヽヽヽヤレ忝や嬉しや」と、悅び勇む折こそあれ、吉岡が仲間斯くと見るよりかつ踞び、「お國元より御息女お園樣お見舞として、只今旅宿へお著きなされましてごはります」「ナニ〳〵、娘が見舞ひに來たとか、ハテ扨女の身でいらぬ事を。シテ道中怪我もなかりしか」「ヤモ隨分御機嫌能く」「滿足滿足。然らば歸りて云はうには、か弱き身には餘程の里數、嘸かし痛く草臥れつらん、身も暮方には歸るであらう、休足して待つてるよと言ひ聞かせよ。早く〳〵」に「ナイ〳〵」と、奴は旅宿へ立歸る。跡見送つて一味齋、賢き心の闇ならぬ、闇に迷ひし親心、「アヽ孝心にしてくれるはよけれども、結句はそれで苦をやむ」と、こぼす涙を春風に、慙ぢて背ける顏の艶、薄き親子の契りとは、後にぞ思ひしられけり。藤藏は見て見ぬふり、「御息女のお出でと有れば、是より直に御宿所へ、イザ御同道致しませう」「イヤ手前はまだ私用もござれば、そこもとは先お先へ」「ハア然らば左樣致さう」と、互に目禮一味齋、假家の内へ入りにける。跡に春風獨笑、かねての方便も手ごはき親仁め、中々すめでは行くまいと、思ひの外工合のよさ。斯うしてからは、手段もし安し。ムヽ斯うつ、斯うして」かう〳〵と、響く野寺の鐘の音も、入相近き磯傳ひ、しづ〳〵歩む向ふより、浪人者とおぼしきが、古大小の柄糸も、ほつれ亂れし破小袖、

すれ違ひさま振返り、「イヤ暫く。それへござるは郡の家中、春風氏にはあらずや」と、聲かけられて立歸り、「ム、身が名を知つたる御浪人は、何人なるぞ」といぶかる色目、「イヤモ名乘るも今更面ぶせ、密々願ひの筋ござれど、他聞を憚り申しかぬる。何卒暫し御左右を」「いかにも承知」と家來に向ひ、「身は是に用事有れば、益内一人跡に殘り、我達は先へ歸れ。早く早く」と追立てやり、近寄つて聲をひそめ、「音聲にても覺あり、貴殿は京極内匠殿」「いかにも左樣」と笠脫捨て、「某國を去つてより、一先上方へと心ざせしが、心殘りは一味齋、恨を一太刀むくはんと、思ふ折しも此防州、曹請奉行に來りしと、聞くとひとしく、究竟の時節かなと、取る物も取りあへず下りしが、いよ〳〵それに違はずや」と、問ふに藤藏邊りに氣を付け、「此度の宮曹請も、殘らずきやつが指圖次第。何が諸家中の請はよし、知行は增す、威勢は日々に門弟はふえる。イヤモ、其無益しさ頑憎さ、折を見合せ一討と、心はせけど我々しき、中々手に立つやつでなし。思はず貴殿に逢うたも幸、何卒きやつを欺し討に」「シイ聲が高い。諸事は内匠が胸に有る。抑一味齋めに意趣といふは、あながち劍術一通りの筋でなし。娘お菊を妻にせんといへば、酢の粉のと承引せず、剩へ人前にて頗恥かゝされ此風體、思へば〳〵口惜しうて、胸板を截割る苦しさ、切りさいなんでも腹いぬ」と、拳を握る無念の齒がみ。同氣相寄る春風

が、邊見廻し、「コレ先生、何も氣遣ふ事はござらぬ。仕樣は斯う」と耳に口、「ム、すりや此所に一味齋。うまし」とかけ出す其氣相。「どつこいやらじ」と止むるを、「放せ」「放さぬ」血氣と强氣、振飛ばされても我武者もの、我身をじつと引きすゑて、「エ、氣が違うたか京極殿、一味齋を切る氣でも、傍にはきやつが數多の家來、寡は衆に敵せずとは、常に貴殿もいうたぢやないか。多勢の中へ切入つて、目ざす老ほれ一人を、切り得てからが命はないぞや」「ヲ、命はとくより捨ててゐる」「イヤ〳〵それは器がちひさい、敵一人に百年の、命をはたすは不覺々々。マア氣をしづめてとつくりと、身がいふ事を聞かつしやれ。コレ一味齋が歸るはの、いつも此道此所。浦の氣色を樂しみとて、駕籠に乘らねば同勢なく、供は仲間只一人、そこを窺ひ討つならば、本望遂げるに手間隙入らず、討つには最上飛道具、其品爰に」と益内が、かたげ持つた る挾箱、中より出す種が島、「腕に手練の内匠殿、百發百中疑ひなし。されど磯邊は人目あり、其松蔭から歸るを待ち、まつたど中を御合點か」と、渡せば取つて、「したり〳〵。微塵流儀の奥義をふるはど、暗夜の烏もたんだ一擊。氣遣ひ無用」と立上れば、悅ぶ藤藏拔討に、あへなや益内眞二ツ。「密事を人に洩らさぬ神文、まつ此通りのお手柄を」「ヲ、いふにや及ぶ」と松蔭へ、忍び行く足春風は、血刀鞘に納りは、「旅宿で聞かん」と眼を配り、心殘して立歸る。麒麟老い

ても駑馬ならぬ身は五調の一味齋、娘に心急ぐ道、照す奴が箱挑燈、光を失ふ星の影、老眼にきつと詠め、「ム、西方は元より金氣、兌の封に當つて七ッの昴星、備を亂して動ずるは、正しく國の良臣に、災有りと兼て聞く。ハテいぶかしの天變」と、我身の上としら砂道、「乘物是へ」に下部ども、ハッと答へてかき寄すれば、直に打乘り「皆急げ」「畏つた」と六尺ども、足を早めて駈け行く、ねらひ過せし京極が、松かげより飛んで出で、「ヱ、手廻にせしか殘念至極、儕老ぼれ遁さじ」と、跡をしたうて 三重追うて行く。

第五

菖蒲葺く軒の香深き一構へ、一味齋が屋形には、末子三之丞が壽とて、飾る兜の奥使、妙どもが緣端に、奏者の役の請答、せはしならびて坐し居たり。入來る禮者は入間野宇内、「端午の御禮」と袂から、名札を置いて出行けば、續いて十木當右衞門、金井運兵衞、根津伴藏、引きもちぎらぬ禮受に、ほつと草臥れ、「ヤレ〳〵心勞やナウ小富、何ほ有るかも數知れぬ御家中のお弟子衆が、お禮〳〵の取次に、出たり入つたり、立つたり居たり、座敷の上のお百度參り、斯う働いたらどこやらも、男が知つたら好もしがろ」「ヲヽお松の身上りな。ヤ其このもしい咄

の次手、此屋形の姉御樣、あれが女の大兵といふのか知らぬ。脊はといや六尺ばかり、器量も好うて劍術が名人で、其くぜ力が强いげな。あんな體に半日でも成つて見たい」「ソリャ又なぜにや」「ハテマア第一押しがきく。女夫喧嘩をするにでも、男の癖と無理八百、いふをいはせずしめ付けて、思ふ存分抱かれて寢る」「ヲヽそりやきつい無分別、大きな體は何所やらも、形相應に大きうて、なみ大體な鼻高では、たんのうする事あるまい」と、譯もなまめく高笑。一間開かせ三之丞、出づる目病の探り足、まだ十三のおとなしく、「ヤイ妙ども、けしからぬ高笑、大姉樣はお留守でも、此頃病氣で下つてござる、お菊樣の居間へ筒拔、主の蔭口不埒の至り、以來をきつと嗜め」と、呵る詞も角立たぬ、愛敬深きうまれ付。取次の侍まかり出で、「衣川彌三左衞門樣御子息、彌三郎樣御出なり」と披露して、表の方へ引かへす。「ヲヽそれ珍客、折惡う母樣は休んでござる、マアお菊樣へしらせよ」と、指圖に下女は立つて行く、程なく〳〵し山鳥の、襖開いて彌三郎、佳節の衣服一入に、榮ある美夫の衣紋付。それとお菊が一間より、こぼれ出でたる絹の香の、すがり付きたさ戀しさの、胸の數々目の内に、しらせあうてぞ座に直り、彌三郎慇懃に、「先以て當日は端午の佳節、御親父一味齋先生にも、防州普請の御役中、恙なく御勤なされ、御家内の御悅び推量いたし、くれ〳〵目出たう存ずる」と挨拶すれば三之

丞、「誠に師弟の義を重んじ、佳儀を祝する御入來の段、父一味齋在宿致さば、いかばかり悦び申さん。ナウ姉様」「ヲヽソレ〳〵、悦ばしやんせいで何とせう。顔を見たれば、嬉しうて〳〵、いひたい事もたんと有るし、そしてから、アノ人目の關のないならば、抱付きたい氣で有ろぞいな」と、思はずふつとすべる口、「コレ、シィ〳〵」と彌三郎が、弟の手前氣を兼ねて、止むるも同じぬるゝ袖、袂をそつと引く糸に、もつれ寄り添ふ妹背中、「戀しかつた」も口の内、じつと引きしめ抱合ふ、傍にあやなき三之丞、「此姉様は物をもいはず、衣川様は何所へぞ」と、さぐる手先に背と背、ちやつと飛退く彌三郎、お菊が胸はさど波の、しがを見せじとさあらぬ顔、「アノママァ三之丞とした事が、わしを惚りさしやつたわいの」「わたしも惚り致しました。今のは何でごましたえ」「フウァノ今のかや、あれはの、アノソレナァ彌三郎様」「ヲヽ〳〵それ〳〵、五月五日は男の節句、武備を飾りの鎧長刀、ちよつと祝儀に組討の、眞似を致して見ましたも、偏へに貴公へお祝ひ」と、詞巧にいひ廻せば、あどない氣には誠しく、「ハッァ思し寄られし御深切、幸けふの菖蒲酒、何はなくともお菊様、彌三郎様へ御酒一つ、一間でお上げなされぬか」と、何氣ないのに氣も落付き、「ヲヽようぞや氣が付いた。彌三郎様、爰は端近一間へ」と、醉はねど先へ轉び寢を、急ぐ手招き小點頭、誘ふこなたに母親が、見るともいざやしら紙

の、障子引立て入る跡に、やゝ默然と三之丞、さしうつむいて坐し居たる、傍に立寄る母お幸、「コレ三之丞、けふはそなたの大事の節句、此頃父御の方からも、事多い中に、文が來て、隨分節句を賑はしう仕てやれとの文體、乙は血の尾と只さへに、目かいの見えぬいぢらしさ、いつかい苦にしてござる上、煩やつたらどうあらう。彦山樣を初めとして、奇瑞の有るとあらゆる佛神、祈らぬ方もない程に、本復は今の内、氣をわさ〳〵としやいの」と、慈悲に餘りの母親が、あいだてなしと人や見ん。「さほど御不便かゝる程、此身の冥加恐ろしい。今も今とて彌三郎殿、端午の佳儀といさましう、お出でに付けてわしが身は、勝れし手者の亂ながら、小太刀一本鎗一筋、操り得ぬのみか苦をかけて、不孝の罪を重ねんより、いつそ死にたうございます」「ヱヱ譯もない事いふ程にの、母が氣までをめいらした。妙どもは何所に居る。三之丞と奥へ行き、面白をかしう酒でも酌み、氣を慰めてやつてくれ」ハイと出て來る浮助ども、「人を浮かすと色事はこつちの得手物、若旦那樣サアお出」と手を引けば、「イヤそれには及ばぬ」と、立つもとほ〳〵病む目より、見る目病まるゝ親心、「ソレ〳〵あぶないぞ〳〵」「イヤもちひさい時から馴れた内、氣遣ひはござりませぬ。申し母樣、冥途の闇に迷ふのは、此樣な物でござりましよな」「ア、おとましい、またかいの。ソレ妙ども」「ハイ〳〵〳〵、先のけ〳〵お馬」でも、乘

らぬ主人をいさめかね、打つれてこそ入りにける。母は我子の後影、見るに付けても心根を、不便と浮む露の間も、忘れ方なき恩愛の、中の間よりも妙が、「御寮人様お歸り」と、しらせにさゝめく勝手口、「ナニお園が戻りやつたか、ヤレ〳〵〳〵待ちかねた。サア〳〵是へ」と、待つ間に程もなつ山に、衣ほすてふ白妙の、顏さへ朱に照り添し、さつきの花の縫小袖、ふりもしどなき千鳥足、跡に付々妙ども、「ヲヽあぶなや」と立寄れば、「ヲット寄るまい〳〵ぞ。あぶないとは何があぶない、酒に醉うたか何ぞの樣に、立騷いで不行儀な。次へ行きや〳〵」と、しかつべらしう三つ指も、いとゞなまめき愛くろし。「アヽ娘待ちかねた。定て一味齋殿も一所であろが、大方御前へ歸國のお目見え、夫で先へ戻りやつたか」「ハイ〳〵〳〵、左樣な樣な物の樣な物でござります」「ヲヽあの人とした事が、遂にない酒機嫌、どなたで御酒をたびやつたぞいなう」「ハイ〳〵〳〵とゝ樣のお供してナ、上つた所が端午の御祝儀、直樣お裏へお禮に上り、東雲樣の御前にて、白藤のお局に、しひにしひられ四はい呑み、それから四の宮志津摩樣の奥方へ參つたればナ、四合入のお盃で、しひ殺されて居る所へ、篠田思安樣がによつと見え、どりやおれが配劑せうかと、お年に似合はぬ强いお酌、アヽ申し〳〵、それではいよ〳〵死にまする、死ぬる、面白い、死ね〳〵〳〵とめつた酌、こりやたまらぬと座敷をはづし、四疊半の圍の内

に、死んだ樣にして居たればナ、白井新吉樣の奧方や、芝山四郎右衞門樣の奧方、信樂樣までが出て見えて、寄つてたかつて盛殺し、とうぐ〳〵とどめをさゝれました」「ヲ、あの子とした事が、常の行儀に似も付かぬ。取分け大事の祝ひ日に、心にかゝる四の字盡し、もう〳〵いうて下さるな」「ハイ〳〵〳〵、左樣ならば申しますまい〳〵〳〵。其替りにはおかゝ樣、お願ひがござります。アノナ、急に殿御を持たしておくれなされませぬか」「ヲヽ是まで幾度いひ出しても、聞入れぬかたいそなたが、殿御を持たうといやるからは、定めて心當があらうの」「アイ、イヽエ」「ムウそんならかねぐ〳〵噂に聞く、豐前の國毛谷村の百姓六助、身は農民に埋れてもあつぱれな文武の勇者、何卒主人音成公へ仕へさせたき夫の願ひ、成らう事なら其人を」「アヽ申し〳〵おかゝ樣、殿御を持たして下さりませと申すは、わたしではござりませぬ」「ムヽそんなら誰に」「アイ妹のお菊に」「ヤヽヽ」「サイナ、どうぞ持たして下さんせぬか」「イヤ〳〵其願ひは聞入れられぬ。家を繼ぐべき三之丞は、所詮本復叶はぬ眼病。さすれば家の名跡は、姉のそなたに極まつた。聟もない內妹に、男はどうも持たされぬ」「コリヤ御尤でござります。左樣ならば母樣に、逢はせましたい人が有る。ソレ〳〵〳〵其子爰へ」に、妙が、抱いて出でたる五ツ子の、すや〳〵寢入るをお園は抱取り、「申し母樣、遁れぬ方に生れし此坊、此園が子にし

てな、吉岡の名跡を相續さすれば、わたしが家を續いだも同然。お赦しなされて妹に、殿御を持たして下さんせ。お願ひ申上げます」と、深き思ひを卷き舌の、詞は酒の科なりし。母はつくづく稚子を、見るより扨は聞及ぶ、孫とはしれどさあらぬ體、「ヲヽ、姉の何いやるやら、系圖正しい名跡を、餘所の胤には續がされぬ。物がたいとゝ樣の、氣質はそなたも知つての筈。道に背いた二つの願ひ、叶はぬ程にいひ出しやんな」「スリヤ是程に申しましても、お聞入れはござりませぬか。此上は是非に及ばぬ、白地な事ながら、妹お菊と彌三郎樣、人しれず忍び合ひ、中に設けた此彌三松、いはゞ眞身の初の孫。お前の口から父上へ、御聞屆けの有る樣に」「ヲヲ心盡しのそなたの願ひ、叶はぬならぬと親がひも、いふにいはれぬ譯ある故」「ソリヤ母樣聞えませぬ。血を分けた親子の中、明されぬとはどうした譯、樣子を聞いた其上では、わたしもいはねばならぬ譯、胸にせまつて心がせく。サア、シテ樣子は其譯は。サア〳〵〳〵」と問詰められ、暫しいらへもなかりしが、「今は是非なし何を隱さう、そなたは拾ひ子。ヲヽ、恟りであろ。連合一味齋殿、殿樣の師範と仰がれ、家中の用ひも淺からねば、何くらからぬ身の上なれども、四十過ぎても子なきを歎け、神に授かるならひもと、夫婦連での伊勢參宮、賽の道すがら、とある木蔭に赤子の泣聲、可愛さうにと拾ひ上げ、見れば添へたる千鳥の

香爐、是こそ名高き和國の名器、久吉公より先達て、仙石何某に給ふと聞きしが、付け添へ捨てし其譯を、問ふ人とてもながの旅、拾ひ歸りて育つる内、お菊といひ、三之丞まで設けしは、夫婦が老の入まいと、心嬉しくけふまでも、包み隱せしそなたの素姓、ほんの親御へ義理もあり、妹や孫に此跡を、相續さゝれぬ入譯は、斯くぞ」と咄す來し方を、聞くに付けてもあぢきなき、野末に捨てし、氏系圖、「そんなら日比大事にかけ、わたしが持ちし香爐が」「ヲイノ、それが眞實の親御の筐」「ハァ扨も〳〵悲しいお咄し、今の今まで眞實の、父上とも母樣とも、思ひ込んだるわたしが願ひ、叶はぬ上は差當り、申さにやならぬ此場の時宜。ソレとゝ樣のお乘物、其儘これへ。早う〳〵」はつと二人の仲間が、手舁にしたる乘物に、としや遲しと立寄つて、「ヤレお歸りか待ちかねし」と、開けば内にあへなき死顏、一目見るより、「ヤァ〳〵〳〵、コリヤ何者が手にかけた。娘樣子は〳〵」とせき立つお幸一間より、こけつ轉びつかけ出る兄弟、空しき骸に取縋り、前後正體なき沈めば、母は詰寄り、「コレお園、樣子は定めて知つて居やらう。ヤイ佐五平、そちや山口のお供の内、定めて敵は知りつらん。何國の誰が業、何者が殺せしぞ。早う聞かせい」「早く申し上げろう」と、友平がせき立つ詞聞くに付け、姉が思ひは百千の、劍に胸をさゝるゝ悲しさ、詞も出でず齒を嚙みしめ、無念涙に佐

五平が、「ヲヽ御尤〳〵。山口の御用首尾能く調ひ、御歸りがけの小松原、何者が所爲にや、御乘物へ鐵砲を打ちかけしと、小者がしらせを聞くとひとしく、旅宿よりは半道餘り、姊御樣の御供致し、宙を飛んでかけ付けしが、早お旦那にはあへなき御最期。お傍に付添ふ若黨佐忠太、俱に深手に苦しみながら、旦那の仇は京極内匠、しるしは彼が二の腕に、切付け置かれし跡ありと、いひも終らず卽座の最期、無念と思へど其甲斐も、悔んで歸らぬ其場の時宜。ヱヽ奥樣、口惜しうござります。友平、推量してくれ」と、悔むにお園もせき上げ〳〵、「佐五平が申す通り、一足早うかけ付けなば、やみ〳〵討たしはせまいものと、涙ながらに立寄つて、改め見れば、此ごとく、飛道具にて仕止めし上、とどめをさしものとゝ樣も、叶はぬ痛手に無念の御最期。直に追付き親の敵、討たんと心ははやれども、妹といひ三之丞、いづれ跡目を定めた上、敵討のお願ひ申し、本望とげたいばつかりに、すご〳〵歸り此譯や、妹が願ひを取交ぜて、醉うた顏してはしたなう、酒に紛らすせつなさを、推量してたべ母樣。コレ妹、弟、嘸口惜しからうなう。海山こえてはる〴〵と、お迎ひに行た此姊が、御遺言の一句も聞かず、いかめしさうに亡骸を、お供申したあぢきなさ。ヱヽ〳〵口惜しう存じます」と、無念にこつたる主從が、涙血汐の瀧津浪、身もうくばかり見えけるが、母は不覺の涙を止め、「コレ我夫一

味齋殿、嘸や無念にござりませう。卑怯未練の京極内匠、何國に隱れ忍ぶとも、草を分けても尋ね出し、修羅の妄執はらさせますぞや」「ヲ、母樣の仰の通り、俱に天を戴かぬ、父上の仇」「旦那の敵、此友平も」「佐五平めも」二人「俱にお願ひ申上げ、敵討の御出立」といさめば兄弟、「實尤、サアお願の御用意」と、はけしき詞に母親は、嬉し涙もいやまして、「ヲヽ出かしやつたゝ、片時も早うお願ひ」と、詞ばかりはいさめども、身はしをれ添ふ袖袂、涙と俱に亡骸を、抱きかゝへて主從が、佛間へこそは入りにける。やゝ時移り表の方、御上使なりと聲高し。斯くと聞くより母お孝、跡に引添ふ姉妹を、杖よ力と泣顏を、會釋になほし出で迎ふ。程なく入來る春風藤藏、衣紋の威儀も麁忽の仁體。つゞいて衣川彌三左衞門、善と惡とをなひまぜの、使者は上座に著きければ、母は下座に詞を卑下し、「お役目とは申しながら、御苦勞を顧みず御入あられしお二人樣、上使の趣氣遣はし、仰聞けられ下されかし」と、親子手を突き窺へば、「ホヽヲ思ひがけなく氣遣ひはさこそ〳〵。一味齋殿不慮の横死、彌三左衞門承つて驚き入り、愁傷申すも詞なく仕合せ。それに付き殿樣より、下し置かるゝ上使の趣」「イヤ〳〵其儀は此藤藏が申し聞けう。一味齋儀、劍術を言立て仕ふる身ながら、人手にかゝり相人も仕留めず、みゝと山口にのめり死に、左程未熟の手練をもつて、八重垣流の蘊奥も極めた顏、ハヽヽ

ハ、事をかし。御前をあざむき年をかさね、喰潰した祿盜人、死首をおつ刎ね、妻子從類死罪の御沙汰も有るべきなれども、餘り不便とお慈悲の餘り、盲目の小童二人の娘、親子四人の命は下さる、屋敷を取上げ阿房拂ひ。上意の趣有りがたい事だと思ひ、片時も早く此家を立退け。ぐづ〳〵出かねば下部に云付け、割竹にて叩き出さす。塵芥一筋杖一本、くすねて出る事ならぬぞ」と、いひならべたる惡言に、むつとはすれど母お幸、さあらぬ體に進み出で、「上意の趣恐れ入つては候へども、我夫一味齋、手練はさもあれ御用の役先、家來も數多召連れたれば、敵いかばかりの謀計有りとも、よも鏖には相成るまじ。扶持を與ふる主の内、左程の大事馳歸り、告知らすべき筈なるに、左右もなければ死骸も參らず、人に討れしなんどとは、跡方もなき世の浮說」「ヤだまれ女、强將の下に弱卒なし、馬鹿の家來にや馬鹿が成るはい。役目終つて一味齋、阿房鳥のきよろ〳〵と、海を眺めて磯づたひ、歸るを見すまし種が島、小筒を以て只一打、脇腹より背骨をかけ、矢狹間のごとくぶち拔かれ、脚も腰も立つ事か。よろめく所をぐしや〳〵突、芋刺す樣に刺殺され、ヤモけうとい死ざま、一分一寸違ひは有るまい。是でも浮說か僞りか。返答あらばいへ聞かん」と、きめ付けられて親子共、いひ遁るべき詞なく、又伏沈み泣居たる。「コリヤ春風氏、御尤のいひ方。此彌三左衞門お手前に、ちと尋ねたき事がご

ざる」「何か〳〵何なりとも」「イヤサ別儀でござらぬ、一味齋の横死はさる事なれども、そこが彼の欺すに手なし、ガ名にしおふ八重垣流の達人、太刀打にては叶はじと、飛道具にて仕止めしは、あつぱれ智慧な曲物ではござらぬか」「いかにも左樣、骨と皮とは云ひながら、侮りがたき一味齋、小筒といへども二ツ玉にて」「フン、打つた子細の具さなは、御邊が手傳ひ仕止めうがな」「ヤ何と」「馬鹿の家來には馬鹿がなるとは、殿をも馬鹿と嘲ける一言。問ふに落ちねど語るに落ちる、我と我罪白狀する、内匠が荷擔人春風藤藏、科は遁れぬ腕廻せ」と、襟がみ摑み投付くれば、樣子小陰に窺ふ友平、飛びかゝつて三寸繩、鞠のごとくにしめ上げたり。「ヲ、友平出かした。猶も詮議のかゝる曲者、庭の小隅へぶち込み置け」「かしこまつかせ、立ちおろ」と、引立てられて赤頬を、投首してぞ引かれ行く。跡に親子が小氣味よさ、心の願ひひ出す、よき汐合と思ふにも、母は稚子抱き出で、「さつきの樣に申せしは、心よからぬ藤藏が、手前を隱す一旦の僞り、實は夫が亡骸も、其場の樣子も承り、思へば〳〵不慮な最期、武藝未熟の故とあつて、妻や子供を御追放とござりましては、一入修羅の妄執も、思ひやられて親子が悲しみ。かく成るはしか三之丞、盲目の身なれば跡續叶はず、氏族の内より一味齋、貰ひ置きたる此稚子、付上りました事ながら、屋形を此儘暫しの月日、お暇下し置か

れませうなら、首尾よく敵を討ちおほせ、立歸つて後彌三松に、御恩を送らす奉公を」と、皆まで言はせず、「そりやならぬ」「トハ又なぜでござりますな」「サレバサ、一味齋は殿の御師範、眼前相手に薄手も負はせず、討たれ死したる其恥は、其身一つと思ふかや。未熟の藝をうか〳〵と、習うた主人は猶馬鹿者、武道の奥も知れたりと、謗は殿もまぬがれ給はず。ソモ是誰が業、皆一味齋の罪ならずや。罪有る者の妻子が願ひ、彌三左衞門此取次は得せまい」「コリヤ衣川樣異なお詞、四海の武將も運つきて、人手にかゝりし例あり。義朝は長田に討たれ、小田春永は光秀に、亡されたぢやござらぬか。四國九國に知られし夫、目に遮らば鬼神も、討つには安き身なれども、手利手練も叶はぬは、弓鐵砲の飛道具、それを不覺の罪科に、敵討の取次せぬとは、弓馬の家の道にくらきか、但し女と理を非に曲げ、取次しよまいのぶしやう業か。サ彌三左衞門樣、御返答聞きませう」と、老のいらだて齒にきせぬ、衣川が傍に詰寄れば、お園わけ入り押隔て、「狂氣の業かコレ母樣、あなたは御上使殿のお代り、お前の樣に云はしやんしては、モ叶ふ願ひも叶はぬわいな」「ィヤ〳〵〳〵構やんな、無理もいはねば慮外もいはず。サァ〳〵〳〵衣川樣、返答どうでござります」と、いらつ母親猶引退け、「エ、コレ〳〵〳〵妹、うろ〳〵と何ぞいの、氣が利かぬ子で有るはい」と、口で呵つて

目でしらす、心を賢き妹が、「サア母様奥へいて、ちと氣を休めて下さんせ」と、妙はしたとり〴〵に、無理に伴ひ入りにけり。跡にお園は物頼む、人前つくる笑ひ聲、「ホ、、、、、、マ母とした事が、お心安いは常の事、けふは御上使重きお役目、身のせつなさに顧みぬ、不調法も女童、御赦し下され。此上くどう申すに及ばず、只よき様に御前の執成」「フン阿房拂を止めにして、敵討のお暇を、乞ひ得てくれよといふ事か。一旦追放との御諚意は、綸言ならねど再びかへらず、片時も早く屋敷を明け、親子諸共立去れ」と、苦り切つて取りあはず。「ササ其お怒は尤ながら、母が不禮は幾重にも」「イヤ身不肖なれども彌三左衞門、老母が詞耳にはかけぬ。お慈悲をもつて追放の、諚意を逆へば死罪に成るがや」「ホ、、、、、罪なうして配所の月を眺めんと、歌人も望みし例あり。科なき科に追拂はれ、他國にさまよひ果てんより、首さしのべて親子共、お國の土に成るのが望、さうなう此家は出づまじ」と、腰をするたる大丈夫、動く氣色はなかりけり。彌三左衞門大きに怒り、「ヤア女と思ひ詞甘く、猶豫に付け込む不敵者。アレ誰か有る引立てよ」と、下知より早くかけ出る組子、面々十手電と、打ちふり〴〵追取廻し、「サア國境まで早歩め。行かずば薙ぎすゑ引出さうか。サア〴〵どうぢや」と聲々なり。「テモ仰山なお衆方、女一人を相手取り、さほど多勢が立騒ぎ、大方内匠の弟子と見た。習

ひ込んだるお流儀の、微塵にならぬ用意仕や。をこがましや」というよもなく、打ちふる鐵刀手首を摑み、七八間狗兒投、續いて二番手三ばん手、腕のしがらみしつかと組む。「ホ、、、ホ、、、男といへどわしからは、よつほど小兵に見るからが、手練の程も靑侍、稽古さんせ」と弓手馬手、とたんの間拍子、ヨイヤサト、投付けられてころ〳〵〳〵、ころびを打つて身退く。跡は多勢が惣がかり、備へを亂し我一に、寄るを張りのけ打ちたふし、相手撰ばぬ働きに、引けば入れかへ立ちかはり、千變萬化といどみしは、目覺しかりける次第なり。只一人に大勢が、叶はぬ赦せとしどろ足、表をさして逃延びたり。透を伺ひ彌三左衞門、長押にかけたる鎗押取り、「慮外の女めそこ引くな」と、用捨もなく突かけるを、よけても透さずたゝみ突、ひらりとはづせば又突きかゝる、馬手にかはし弓手に流し、程よく汐首かいつかみ、穗先も雪の細腕に、かためし手の内大磐石。「ホ、ヲ手並は見えた」と聲高く、開く一間の障子の内、中央に大守音成、御扈從には衣川彌三郎、近習の侍雲のごとく、敬ひかしづき坐し給ふ。音成仁和の御まなじり、「日頃忠勤怠りなく、師範なしたる一味齋、横死と聞くより胸苦しく、定て汝等親子の者、敵を討たまほしからん、あつぱれ討たして名を日本に取らせんと、彌三郎に案内させ、裏道より來りしかども、敵は一流手練の内匠、討ち得ん事の覺束なく、手竝を見んため彌三左

衛門、詞を以て心を鬬し、手だれの力者が圍みを破る、其手並では京極内匠、鬼神なりとも打ちかねまじ、心任せに發足をさし赦す。さるにても一味齋、知行は與へ置きたれども、奥義を傳へし我師匠、死骸に一目暇乞と、仰の下に衣川が、下知にはかなき死骸を、御目通りに直し置く。音成兩眼うるませ給ひ、「誠や名香は薫るをもつて火に燒かれ、花は色香の妙なるより、折り取らるゝも浮世のさま。惜しや無雙の一味齋、無慙の最期とけけるよな。敵はそれと知れたる上、天を翔り地をくゞるとも、師恩を報ふ音成が、力と成つて汝等に、討得させん事手裏に有り。かほどの手者も運盡きて、京極づれが太刀先に、百年の壽を斷たんとは、思はざりしに殘念や」と、悲歎にむせぶ御涙、厚き惠に三人は、只ハッ〳〵とひれふして、有りがた泣に泣き沈む。思ひがけなや一間の内、あつと叫びて飛走る血汐、驚き障子押開くる、内に哀れや三之丞、腹一文字に息たえ〳〵、「ナウ情ない時も時、ひよんな事してたもつた」と、取付きすがれば、「ヱ、見ぐるしい母樣、皆樣も見てござる、泣いてばし下さるな」と、今際の身にも居並びし、人目をはづるいぢらしさ。あるにもあられず母親が、「コレィナウ〳〵、聞きやつたかしらぬが、殿樣のお慈悲でとゝ樣の敵討のお願ひ叶ひ、そなたも一所に連れだとと、思うて居るもの何故に、何を不足の此生害。夫に別れ力ない、母に此上命をば、ちゞめよとての覺悟か」

と、恨みかこてば、「ァ、母様勿體ない、何しに其氣でござりましよ。チエ、有りがたい殿様、けなりいは母さま姉様。只三人の兄弟も、二人は女わし一人、男に生れた甲斐はなく、一生父のお世話になり、非業にお果てなされたる、敵を討ちに行きたうても、目かいは見えず口惜しい、弓矢神にも生地神にも、見はなされたる此體、せめて門出の血祭りと、成つて死ぬれば父上に、冥途で詞も有らうかと、思ひ極めた覺悟にも、名殘をしい母様姉様、此世からなる盲目の、暗の地獄に落つるとも、首尾能く敵を討つたとの、冥途へ告ぐる便りには、くゆらす香の手向をば、草葉の蔭から待ちます」と、いふも苦しき息遣ひ。太守も不便と瞬しげく、「誰か有る、春風藤藏を是へ引け」ァッと答へて友平が、憎さも憎しとしばり繩、宙に引立て馳出づる。「ホヽヲ罪は今更揚ぐるには及ばず、重々につくきそやつが所爲、敵の片はれ冥途の門出、豫讓が裂きし衣にも、まさりし父へ家土産ならん。ソレお園、首刎ね弟にくれよ」ハッといふ間も一討に、水もたまらず春風が、首提げて立向ひ、「コレ〳〵〳〵三之丞、殿様の御恵有りがたう思やいの」と、首差寄すれば苦しさ忘れ手に探り、「チエ、有りがたい忝い。儕ようマアとゝ様を、むごたらしう討ちをつたな。憎いといはうか、恨めしいといはうか、どう仕たら腹いえう」と、たぶさ摑んで緣板に、打付け〳〵にぎり付け、「嬉しや私は殿様の、お蔭で母様

姉様より、手柄始を仕ましたも、海山深き御恩のお禮、死んだ跡でも殿様へ、忠義を忘れて下さんすな。殿様お暇申上げます。母様御無事で、姉様まめで」「まめで〳〵とつど〳〵に、いんで來られもする様に、死んでたもんな〳〵」と夕霧くらき短夜の、宵の夢とぞ成りにけり。コハそも夢かと三人が、跡や枕に取りすがり、わつと一度に聲立てて、涙は死出の山路に、さつき雨とぞ降りなまし。彌三左衞門聲勵まし、「よしなき歎きに時移り、此上猶豫は恐れ有り。一味齋と三之丞、二人が尸は彌三郎、よく取置いて亡き跡の、問弔も怠なく、此家に留守の氣遣ひなし。早打立ちやれ」と勵ませば、實にもと親子が立上り、讐討御免下さる上、跡に心も殘らねば、此儘直に發足と、いさむ中にも妹が、暫し別れもうなる子の、彌三松連れて、立上れば、庭におづ〳〵二人の奴、「我々二人も御一所に」と、尻引からげ勇立つ。お園制して、「いや〳〵、一ッに行かば人目あり、我々とても敵をば、ねらふ間は別れ〳〵、供は叶はぬさりながら、敵の有家聞出すは、そち達二人が忠義の手際、勝手次第」と立並ぶ、中で手利の大やうさ、「いざさせ給へ母様」と先にすゝめて立出づる。「ヤレ待て三人餞別せん。用意の品あれへ持て」はつと小姓が捧げ出で、二人が前に直し置く。「小太刀二振二人の娘へ。母へ遣はす長刀は、連立つ中の長船祐定」「コハ有りがたや」といたどけば、「イデ門出の盃」と、扇を

さつと押開き、「此扇面に畫きしは、浪に戯る三つの猩々、取りも直さず三人が、老いせぬ宿の門出も、頓て目出たう歸る浪」ハヽッと母が請初めて、廻る扇の請けわたし。「肴くれう。ウダとこきりこの二つの竹は、よゝを重ねて打納めたる御代かな。いづれも立ちやれ」ハッと三人が立つ事は立上れども、屋形の名殘、よしや遂には出でぬべき、浮世の月の照りくもり、定めなく〳〵出でて行く、思ひがけなき後より、不意を見すまし飛來る鐵丸、透さず袖にて打拂ひ打拂ひ、「ムヽこりや百兩の金子の包」「ホヽヲ飛道具にも氣遣ひなし、路用にせい」「エヽ重々の御情」「爰構はずと行きやれ〳〵」「ハア」

第六

ウタ 玉の御殿も獨寢はいやよ、さまと葛屋の忍び寢に、見て明したや須磨の月。鄙も名所の一ふしは、心ありその海端に、葭簀圍の茶屋が軒、道行く人が一群に、暫し立寄り足休め、茶呑話の口々に、「ヤ何と皆の衆、月日の立つは夢の間ぢやないかいの。暑い長いの六月もつい是盆前、秋のしるしか朝晩は大分涼しい」「ヲヽソレ〳〵、其月日の立つ次手に、來る十五日は精靈祭、何所もかしこも冥途からお客設け、瓜や茄子やあかのみや味ない盡し、あんな馳走を悅

んで、呼ばれて來る佛の住家、極樂といふ所は、よく〳〵不自由な所と見えた。ア、思ふ儘な浮世なら、盆の日一日おりや地獄へ行て見たい」「ソリャ又なぜに」「ハテ餓鬼も佛も一同に、婆婆へ〳〵と來た留守事、青鬼赤鬼牛頭馬頭どもをせぶらかし、罪人どもをさいなんだ、手や足のたくあん漬、目の玉の飛だんご、頼の皮の厚燒などが喰て見たい。ハ、、、」と蓼を喰ふ、蟲も好き〴〵須磨寺の、鐘に驚く道者ども、「ソリャ日暮ぢや」とちり〴〵に、行く跡片付けとつかはと、女も宿へ立歸る。おくるゝも、終には落つる露の身の、此地や我を待つぞとも、しら砂道をたよ〳〵と、一味齋の妹娘、お菊が手を引き稚子を、杖よ柱よ後楯、供に從ふ友平が、背負ふ葛籠もかひ〴〵しく、立止つて、「ィヤ申し奥樣、親旦那不慮にお果てなされしより、何卒敵に廻り逢ひ、一太刀お討ちなされんとの御存念、ハテ奴めが爲にもお主の仇、儕やれ助太刀して、あつぱれお討たせ申さんと、爰までお供は致したれども、お力落しの上旅のお勞れ、何やらかやらでお顔持もすぐれず、御祝儀は申納め、もしもの事がござりましては、却つて御不孝。ハテモ佛樣は見通し、是までお出かけなされたで、お討ちなされたも御同然、一先づ國へお歸りなされ、とつくりと御養生、お前樣のお體を、親御の形見とお大事になされますも、又一つの御孝行かと存じます」と、愚智文盲も遣ひ人の、主に見習ふ眞身の詞。「ヲ、深切によう

云うてたもつた。わしはたよわい女の事、男といへば稚い彌三松、一人ならず ふたりの足弱、長の道中愛想もつかさず、ホンニそなたを父上の、息災なうち侍に、取立てなんだが、今では悔しい。是非一刀討たいではと、思ひ込んだる父の仇、たとへ此身が病勞れ、敵に出合ひ運盡きて、返り討に逢ふとても」「アヽ申しその返り討云はぬ事。其お心を聞く上は、雲の裏まで御供致し、御本意を遂げさせまする、ガ其お足では道はか行かず、夜露を請けては一倍身の毒。私めは跡の宿へ立戻り、駕籠借つて來てお乘せ申さん、それまでちとの間お二人は、此所で御休息。幸の此茶店、サア爰にて暫し」と氣を付くれば、やんちや盛りの彌三松が、「べいよ、何所ぞへ行くならおれも行かう」「アヽ、めつさうな事いはしやりませ。コレべいは疝氣が起つた故、あつゝをするに行きまする。ぼん樣もござりましたら、又醫者殿が手を見て、あつゝをするうと云はうぞえ。どりや、早行て來て」と足がるに、かしこをさして急ぎ行く。「イヤ〳〵、行かにやきかぬ」と跡追うて泣く子を母がすかしかね、「コレ彌三松、又忘りやつたの。殿樣のお蔭で、何くらからぬ内を振捨て、此樣に出て來たは、母が爲には父上、そなたが爲には祖父樣の、敵を討ちに出たのぢやないか。町人百姓の子と違ひ、侍の子は年相應、智慧才覺がなければならず、ちと嗜んだがよいわいやい。母は比日氣色は惡し、其樣にわやく言やるのが、ほつとりと聞きづ

らい。今にも敵に出合うたら、どうせうと思うてゐるぞ、定めて泣きがなするであろ」と、勵ます母が顔眺め、「ワァイ何の敵がこはからう、今でも爰へ來をつたら、コレ斯うしてこます」と小脇差、拔くより早く飛上り、松の一枝切落す。「ヲ、出かしやつた〳〵」と、撫でつさすりつ母親が、あいだてなさも先立ちし、父の孫ぞと譽めそやす。折から須磨の家々に、精靈祭る高燈籠、見付ける彌三松、「コレかゝ樣、アリヤ何の火ぢやや」「ヲ、あれはの、先立たしやつた佛樣へ、お供へ申す火ぢやわいの」「そんならこちもあの樣に火を點して」「ヲ、内なら安い事なれど、心に任せぬ旅の空、無理な事いはぬものぢや」「いや〳〵夫でも點して下され」と、頑是ない子にせがまれて、詮方ながき葛籠の紐、松にふりかけ蠟燭に、火繩をうつす硫黄まで、旅の用意の馬挑灯、引上ぐれば眺め入り、「かゝ樣、こちも此樣に火を點すと、死なしやつた祖父樣が、是見て嬉しがらしやるなァ」と、聞くに母親胸ふさがり、「たつた一人のほんそ孫、そなたが思うて供へた物、悅ばしやんせいで何とせう、請けさしやんせいで何とせうぞいの。それに付けても父上の、敵の在家尋ねんと、大事の母樣姉樣とも、別れ〳〵に國を出で、ねらふ月日は重なれど、廻り逢はねばのめ〳〵と、得討たぬ不孝不甲斐なさ、嘸父上の冥途から、呵つてござらうお腹が立たう、堪忍して下さりませえ。稚心に盂蘭盆の、火を點せよとせがんだは、

思ひがけなき父上の、劒の難に身をさかれ、冥途に迷うてござるのを、物が知らしていはしたか、杖柱とも姫ごぜの、頼む夫には置き別れ、親にも永離三悪の、はかない悲しいあちきない、世の憂き事を身一つに、寄せたは何の因果ぞ」と、人目なければかこち立て、正體なみだ地に落ちて、野路の草葉や枯れぬらん。親の心は知らぬ子が、膝にもたれて現なく、寢入ればお菊は顔を上げ、「可愛や坊が内ならば、透間の風もいとふ身の、母が膝をば蓆とも、寢冷させじと裾打著せ、我身もそこに友平が、歸るをまつの下風も、假寢の伽となりぬらん。夜も早初夜の空くもり、遠寺の鐘も蕭々と、降る雨凌ぐ傘も、破羽二重の垢付きし、大小腰に摑み差、錆浪人のみすぼらしく、歩み來かゝり立寄りて、「ヤレ〳〵〳〵思はぬ俄雨、降ると日和になるが一時、急がずば濡れざらましを旅人の、跡より晴るゝ野路の村雨。太田道灌よく讀んだ」と、つぶやきながら邊りを見廻し、「幸の挑灯ドレ一ぷく」と懐より、煙管取出しすつぱすぱ、「ヤ旅人さうながしかも女、路錢に盡きて野宿したか。さうとも見えぬ身の廻り、松に挑灯かけたのは、道の友待つ目印か。何者なるぞ」と立寄つて、顔差覗けば目を開き、「ヤア〳〵そなたは敵京極内匠」「ム、さういふそちはお菊ぢやないか。テモよい所で逢うたなあ。我に逢ひたうて〳〵、夢現にも忘れぬ程、戀ひこがれて居たはいやい」と、いふ聲耳に目覺す彌三松。樣子

見せじと母親が、フツト燈火卽座の氣轉、心ありとは悟らぬ内匠、「コリヤ何で灯を消した。ハア聞えた、暗がりにして逃げうでな。斯う見付けたりや逃がしはせぬ。姿なら風俗なら、春の柳に梅花の薫、前にかはらぬ、うまい〳〵。手強いそちが親吉岡、討つて捨てたも立退いたも、是皆そもじに惚れたから。命にもかへ身にもかへ、思ふ男を其樣に、嫌ふものではないわいやい。空は曇るし人はなし、斯ういふ所で出合ふのが、結ぶの神の引合せ、應というて抱かれて寢い。いやといへば只一討、返り討ぢやがそれでもいやか。返答せい、どうぢや〳〵」どうぢや〳〵は口ばかり、目には佛もなかりけり。お菊は今ぞ優曇花の、仇を討たんず氣くばりも、さあらぬ體に、「ホ、ヽ、ヽ、内匠樣とした事が、アノわたしやとうからお前にな、心の内に神かけて」「ヤ、何ぢや、心の内に神かけて」「アイ、惚れて居るはいなア」「惚れてゐるとはきつい嘘」「テモマア疑ひ深い。たとへ業平見る樣な、よい男でもこつちから、思ふばかりはせんがない。ホンニ國に居た時から、付けて廻しつお前の心底、嬉しいとは思ひながら、アイといはれぬ人目の關、今では旅の遠慮もなし、ハテどうなりともなる氣でも、顏見て居ては恥しさに、それ故火をば消したのはな」斯うせんばかりと拔打に、切込む刀を柄で請止め、「其手ぢや行かぬ。さう手剛い程猶執心、應といはねば其體、首切つておいても抱いて寢る。痛い目せぬ

間に得心して、サきり〳〵抱かれて寢上らう」と、はつしと蹴られ齒咬をなし、「チエヽ念の入つた極惡人、むだ言いはずと勝負しや。サア〳〵〳〵どうぢや」と詰めかくれば、「コリヤヤイ、ごくにも立たぬよまひ言ほざくなやい。我が爲めには親の敵、おれを其樣に切りたがるおりや又我が內股の、長刀疵が望ぢやはい。つれないはずと、コリヤなびきをれ」と、猫撫聲の頗憎さ、油斷見すまし鐵石も、割れよとお菊が尖き刀、丁ど請止め、「ヨウ〳〵御手練上達上達。所を我等がまつ斯う」と、付込む刀請流し、拂へば付入る虛々實々、火花を散して戰うたり。さすがかよわきお菊が刀、打落されて「コハ無念」と、漂ふ肩先一刀、切られながらによろほひ寄り、內匠が柄元しつかと取り、「エヽ〳〵〳〵口をしや腹の立つ。かすり疵さへ負はせもせず、此儘死なば父上に、冥途で何と言譯せう、言譯がないわいの。エヽ姉樣一所に有るならば、此無念さはあるまいもの、それも今更悔んで詮なし。體は千々に切らるゝとも、やはか此場を遁さうか」と、氣は磐石の女氣も、深手によわる血の涙。「ヲ、悲しかろ〳〵。コレよう聞きや。マよく〳〵深い緣なりやこそ、親子ともにおれが世話。冥途へ遣るには何切がよかろうな、胴切がよかろうか、梨子割にせうか、薄切も面白い。待てよ初太刀は袈裟切、二の太刀に極樂參り、佛になれ」と拜み討、直にまたがりとどめの刀、ゑぐり苦しき四苦八苦、虛空を摑み無

念の最期、哀れといふも餘りあり。「ハ、、、まづ一方は片付いた。心がかりはこいつが姉、おれを方々尋ねて居をろ。エ、思ふ樣なら姉めをぶち放し、我を助けて置きたいわい。エ、儘ならぬ浮世ぢやわい。死んでも顏のかはいらしさ、ちと笑やいの〳〵。モウ往ぬぞよ、さばや、恨があらば幽靈に成つて出て、おれと一所に行かぬかい。エ、儘よ、何の死人に文言ぢや」と、つぶやく血刀押拭ひ、鞘にをさまる不敵者、塵打拂ひあたりを見廻し、「テモ扨も、おれにちよほくさぬかす内、ちやくと葛籠を片付けをつた。慈悲深い此内匠樣へ、天道より與ふる糧、忝し」と立寄つて、背負ふ我慢の欲惡心、ウタヒ「此者共を手の下に、討つはいか樣鬼神か、人間にてはよも有らじ。ハ、、、」思ひがけなき葛籠より、ぐつと突出す小太刀の切先、恟り驚きふりおろす、折から歸る友平が、あやしと差出す提灯ばつたり。「シヤ曲者」と拔合せ、二打三打打合ひしが、ひらりとかはしいつさんに、跡をくらまし失せてけり。「ヤア何くまでも」と、友平が、かけ出す足元躓く死骸。「ヤアコリヤお菊樣が切られてござる。お菊樣〳〵。チエ今一足早くばなア、斯くやみ〳〵と討たしはせじ。エ、しなしたり口惜しや、儕曲者逃さうが」とかけ行かんにも跡氣遣ひ、「此ほん樣は何所にござる、彌三松樣〳〵」と、心は空に闇路をば、照す燈籠幸と、手早く紐を引きほどき、「彌三松樣〳〵」と、尋ぬる目先、落ちたる守りの袋物、「コリ

ヤ何ぢや、何でも敵の手がかり」と、袖に捻込み、見廻すこなた、あやしや葛籠の内よりも、きらめく刃先「コハ不思議」と、立寄り紐解き引開くる、内に彌三松、友平見るより、「ヤアほん様か、ようまめで居て下さつたなう〳〵。シテ〳〵、誰が此中へお前をば、斯うして入れて置きました、譯をいはしやれ、サヽどうぢや〳〵」「ィヤ譯は何にも知らぬけれど、かゝ様が入れて置かしやつた。跡で誰やら母様をきついめに合はしをつた。おれが這入つて居る葛籠を、負うていなうとしをる故、出る事はならず。中から此脇差で突いたばかりぢや。かゝ様は何所にござる、おりやかゝ様に逢ひたいわいやい。かゝ様〳〵」と、母は此世になきぞとも、知らず泣く〳〵したふ子を、見る友平は我胸を、百千鈞の鐵槌に、打碎かるゝ心のせつなさ、「ヲヽ道理ぢや〳〵、御尤ぢや〳〵。ガコレ何にも泣く事はない。かゝ様はの、ほんを連れて跡から來いてゝ、つうつと先へ行かしやつた」「そんならわしも早行きたい」「ヲヽ、行かいでどうしましよ。アヽ、何にも知らず可愛さうに、佛様ではあるわいな。其佛より此佛、南無阿彌陀〳〵〳〵」いたはし菊が亡骸を、見せじ泣かせじ稚子に、隱す葛籠は殯、涙かくせど聲くもり、「サアほん様行きましよ」と、手を引かれ行く子は下に、母はせなかに友平が、生死を隔つ涙川、浪のあはれや磯づたひ、「かゝ様いなう〳〵」是非もなく〳〵三重たどりゆく。

第七

すがるふす、栗栖の小野の百千草、花の秋とやゆふ顔も、色をまじへてさま〴〵に、街の多き在所道、直ならぬ身の隱れ笠、袋、分銅玉に鍵、贋きし板に寄りたかる、往來の人も攝み頼、「張はどうぢや」と胴取が、獨樂の心木を捻廻し、胴取「サア〳〵〳〵親は一割子は四割、欲の慰み氣の藥、えいか〳〵〳〵、ソレ廻つて有るぞ。ソリヤ出たは、チット玉ぢやぞ。五文あるは、味いは〳〵〳〵。やつぱり今度も玉のねまりをいてこまそ。玉のねまり〳〵」「イヤコレ茂九郎、其玉のねまりは人油というて、切疵にようきくげなの」胴「ハテコレ話しせずと皆しか〳〵張らんせ〳〵」「チイ合點ぢや、玉よ〳〵」「ヤ袋樣出て下さりませ〳〵」「コリヤ笠來てくれいよ」「イヤ簑がきてほしい」「おりや分銅にせう」胴「サア皆張はよごんすか。ハア時に鍵は明いてあるの。エイハ、そんなら親から勝負ぢや」と、胴側はずんで眼を三角。六角のこまころりとこけ、「出たのは何ぢや」胴「アイ鍵でごんす」と引かけて、皆なでに錢たくし込む。負腹立てて張人ども、「エ、どうやらくらの有りさうな、けたいなことぢや」と一はな立ち、しやべる男を引とらへ、「ヤイ四三の胴八というて、手綺麗な胴頭を、くらであらうとぬかしたがよいか、

是がよいか」と頬ぴつしやり、強られて附鼻ころりと落ち、「ヒヤア〳〵〳〵男の鼻柱を落したな、返せ〳〵鼻返せ」「ひやなとは鼻か」「ひやなぢや」「ヤイ馬鹿め、鼻なら爰に有るはえ」と、蹴ちらかされて砂まぶれの、鼻懐へねぢ込んで、くた〳〵つぶやき歸りける。「何ぼべらぼな奴らでも、まんざら唯も手繰られず、相應に骨が折れる、ドレ一ふく」とすり燧、火口へ移るちり〳〵日脚、鼻緒ずれしてちんがちが、ちんば引摺り下駄片し、さけた傘辻君の、所體失ふ歩みぶり。「ホヽヲ君達が早う出かけた。雨も降らぬにきつい用心ぢやの」「サイナア、どうやら曇つてあつた故、持つて來て邪魔になる。いつそ獨樂に笠はろかいな」「夜ばりこきめらが何ぬかすぞい、日がな一日阿房どもを相人にほつとりと草臥れる。併しおれがこま廻して手を遣ふのも、わいらが客に腰遣ふのも、しんどは變らぬけたいな商賣。ハヽヽヽ、イヤモとんといや氣になつたはい」「サアこちらも勤は飽いたはいな、コレ聞き、此間も經師屋の提槌見る樣な物で、わしが錢箱をすつての事、突き碎かうと仕をつたわいな」「イヤそりやまだしもぢや。わしや先度、竿の樣な物で突かりよとした」「ハテそれは長い物であつたのゝ」「サア烏差であつたか知らぬ、ホヽヽヽヽヽ」「イヤいつでも小鹿やお仙めは、うき〳〵しけつかるが、黄疸の菊野めは、頬ばつかりが浮々と黄色で、棚の下に小さうなつてけつかる所は、とんと瓢簞の

化物ぢや」「サアそんな事かして、容を押へうとしても、ぬらくら欺して拔けをるは」「アリヤだますぢやない、なまづぢや はいの」胴「ハヽヽヽわいらがいふ事聞いて居ると腹がかへるはい」「ヲ、減ろよりましかいな」胴「イヤほんに、わいらも腹が淋しなつたら、早う仕舞うてこちへ來い。なんなと立てるがな」「ハヽお前の所は何所ぢやえ、こちか」「こちや七月のない所ぢやはやい」「ソリヤ何所ぢやいな」「ハテ盆なしぢや」と打笑ひ、荷を振かたげ別れ行く。若黨と、いへども年の古大小、さすがに武家のおとなとて、ぎつと角ある國訛り、「コリヤ〳〵夜發ども、今夕も又われ達に、揚料とやらを下さるからは、宿所へ早く引取れよ」と、財布とくとく明いた口、めい〳〵一歩有封に入る。「年の廻りで有りがたい、今宵で三日金貰ひ、おいどへ土を付けずに仕舞ふ。コリヤマアどうしたお志」「イヤサ別の子細はない。此所の鎮守牛頭天皇は、靈驗あらたなるによつて、手前が御主人、七日の通夜を遊ばさるゝ、御祈禱の其間、施しのお金だはい」「ソリヤこそ樣子がありまの松ぢや」「ヲ、そんならこちらは因幡の松よ。ウタ おばゝ四十九で白齒で島田で信濃へ嫁入、ヤレ〳〵〳〵こんな詰らぬ、ヨヤサノサノ〳〵事はない」仇口々に歸りける。「ハテ騷がしい女ども、ドリヤ此樣子御主人へ、申上げん」と老人の、心は先へとつかはと、元來し道へと引返す。薄を分くる秋風が、吹送りたる乘物は、急ぐ

とせねどおのづから、くるす野にこそ著きにけり。「ハヽ、只今途中ながら申上げたる通り、夜發どもは殘らず拂ひ置きました」と、引戸開くれば立出づる、容儀器量もよし岡が、娘と誰かゆふげはひ、作りやつして辻君と、見せばや見せん其風情。「今宵も是に通夜すれば、明方に迎ひの乘物。そち達は旅宿へ歸れ、早う〳〵」と追ひかへし、邊り見廻し獨言、「旅宿近邊の人目を憚り、毎夜爰まで乘物にて忍び出で、往來の人をためし見るも今宵で五夜さ、夫ぞと思ふ者にも出合はぬは、神佛のお惠みのないのかと、思へば悲しい身の上。一味齋が娘ともいはるゝ者が此樣な、夜發立君の姿にやつし、苦勞辛苦をする事も、皆京極めが所爲故、憎しと思ふ念力に、尋ね逢はいで置かうか」と、男勝りの其魂、一腰隱し置く露の、草のしげみに立盡す、絹物ながらしみづきて、一重に薄き青侍、通りかゝるを走り寄り、「遊んでおくれ」と袖口に、手を差込めど臆めぬ體、鼻に扇の厭味して、「ハヽア月前の惣州、面白いなあ。併し襲中に四文錢が三銅、是を遣したどせんの、二文の釣にかゝろより、我住む宿へ歸ろやれ。コレそもじは其處にいつまでも、いなりの惣嫁ぢやあるまいか」と、まつ毛ぬらして、行過ぐる。大道一ぱい大股に、すれぬ太股すれた顏、取出し相撲が步み寄り、「菊野よ、小せんよ。又今夜も居らぬはい。ホヽヲえらいな〳〵。姉よ、一番もんでくれぬかい。いかなお敵でもなァ、コ

リヤ左差いたらなア」と寄りかけしが、我より抜群大女房、見るよりしよけるあまへ聲、「伯母さん地取見にごんせや、だんないわいの。どいつでも止めをつたが最期、此いたち川が聞かんのぢや。エヽコレおれが力が見せたい」と、嘘は見えすく褌で、伊達こきちらしいたち川、尻こそばうも逃歸る。又の往來をまつ蟲も、すだく鈴蟲轡の音、八條流の乘振に、立派を見する西國武士、進ませ手綱行く駒の、道をさへぎり、「申し〳〵、遊んでおくれ」と掛鞍に手をかくれば、「ヤイコリヤ〳〵、御用先を妨ぐる不敵の女め、止めるに事をかき、馬を止むるとはよつ程な助兵衛やつ。そこ放せ、下れ〳〵下りをらう」「イヤ、コリヤ〳〵家來ども暫く待て、摺留の心を以て扣へしは、樣子ある女と見ゆる。燈を持て」と提灯の、火影にとつくと互の人柄、見上げ見下し打點頭き、「コリヤそち達は行先の出口に扣へ待合せよ。早行け〳〵」と家來を拂ひ、「實さま絶えて久しき對面といひ、殊更夜隱の事なれども、中々見違へは致さぬ。こゝ元は藝州吉岡氏の御息女でござらうがの」「エヽ、イヤ左樣の者ではござりませぬ」「イヤイヤ隱召さるゝな」と、馬の三途へ膝折りかゞめ、「拙者事は立浪家の執權、轟傳五右衛門と申す者、一味齋殿の御高名を慕ひ、お國へ推參致せしは早十七ケ年以前、其時そこもとは御幼少の折なれば、よも見覺えは致されまい。御親父には數度御對顏致し、劍術奥義の端々をも、承り

得たる事なれば、外ならず門人同然の傳五右衛門、是までも書通を以て音信絶えず。然る所一味齋殿不慮の横死と聞きしより、エ、しなしたり殘念や、直樣馳付け諸共に、敵の詮議と存じたれど、仕官の身なれば詮方なく、明暮無念に思ひしが、不思議にも今その息女に廻り逢ひし事、吉岡殿を再び見申す心地して落涙致す。さりながら心得ぬ其有樣は、エ、聞えた、コリヤ敵をねらはん其爲に、姿をやつせし辻君なるか。ハテサテたくましきお志、女ながらも天晴家柄、いか樣親父の胤なるぞや。ホ、ヲ出かされたり、頼もし」と、感じ入つたる面色に、人の心の花見えし、園ぞと名乘り手をつけば、傳五右衛門は懐中より、燒印の札取出し、「敵の在所分明ならずば、六十餘州の端々までも、搜し尋ぬる所存ならんが、今九州には新關あつて、迂濶に通行なりがたし。其こそ關所の往來札、惠むは夜發へ今宵の花代」「エ、忝い お志、本望遂げて此お禮は」「ヲ、サ目出たう承はらん。おさらば」「さらば」と默禮し、誠の心つくし人、馬を早めて急ぎ行く。便りなき身は世の人の、情の詞力草、伏拜みてぞ泣く涙。かゝる折からいつきせき、來かゝる奴もまつ黑な、紺のだいなし分らぬ闇、ほうど躓き行當り、「是はしたり、めつたに心のせきまする者だから、でつかちない龕相致した、まつぴら〳〵。次手にお尋ね申さうは、此所の鎭守とやらに、女中一人通夜なされてござるのを、御存じはあるまいかな」

「ム、さういやるは友平ではないかいの」「エ、さうおつしやるはお園樣でござりますか。是はしたり、ヤレ〳〵嬉しや〳〵、何時か仰置かれましたる御旅宿へ、漸〳〵著仕つたる所、是に御座なさるゝと聞くやいな、イヤモ知らない道を暗雲に、尋ねましてごはります」「ヲ、大儀々々。長しい道中といひ、女子供の初旅なれば、さぞかしそなたのいかい苦勞、よう介抱してたもつたなう。さうしてアノ妹や彌三松は、旅宿に休んで居やるかや」「成程ほん樣は御旅宿で、佐五平に急度預け置きましたが、隨分御機嫌は能くござります」「ヲ、それで安堵しました。いやもう案じられたは妹が事、虚性な上に持病の癪、もし道で發りはせなんだか、達者であつたか、無事なか」と、かきたぐる程尋ねられ、答へん詞あら涙、膝に淵なすばかりなり。「ム、さしうつむいて涙の體は、合點が行かぬ氣遣はしい。エ、どうやら胸がさわがれて心元ない、樣子を早う聞かしてくれ。なぜ返事せぬコリヤ友平、何とぢや、どうぢや」とせりかけられ、「エ、無念な、口惜しうござりますはいなう」「ナニ口惜しい無念なとは」「サア申上ぐるも面目ない事だが、お妹樣お菊樣は、人手にかゝつてあへない御最期」ヤアと仰天氣は半亂、餘りの事に涙も出ず、むしやぶり付いて引きしやなぐり、「エ、〳〵〳〵何のことぢやぞいやい、誠かいやい〳〵」「ヲ、お道理だ〳〵わいの」「サア何者の所爲、敵は何やつ。早ういへ、こりやどう

せうぞいやい〳〵」「ヲ、お道理だ〳〵〳〵、道理でござりますはいなう」「サ、コリヤ何所での事ぢや」「サレバ、須磨の邊までお供は致しましたが、旅勞れにや御持病發り、うろたへ廻つて私めは、駕籠借るへいと跡の宿へ引返し、又立戻る途中にて、あやしき曲者、下郎を目がけ切りかけしを、抜合せ二打三打、合す間もなく逃行きしを、追かくる足元に、痛はしやお菊樣、明所もなしに數ヶ所の深手、呼びたけつても返らぬお命。まだ天道のおひかへか、若子樣にはお怪我もなければ、悲しい中にも心を勵まし、此曲者めは必定敵、追付いて捕へんと、思へど遙時も過ぎ、方角知れねば詮方も、なく〳〵御骸取納め、御筐にもと切取りし、此黑髮をお妹樣と、思し召されて下さりませ。御歎きもお腹立も御尤だ、御尤でごはりますはいの〳〵。いしこらしくお供をしながら、此樣な事に逢はせましたは、手を出してせぬばかり、やつぱりおらが殺しましたも同じ事、主殺しだわいの〳〵。ずだ〳〵になされたとてお恨はない。サア突かつしやりませ、切刻んで下されよ」と、首差付くれば泣く目を拂ひ、「コリヤ身の言譯をするに及ばぬ、少しなりとも手がかりに、なるべき事をなぜいはぬ、うろたへたか友平」と、いはれてそれよと取出す、守り袋を手に取つて、此中にはいか樣な物があるぞ」「サア臍の緒がごはります」「シテ書付は」「永祿九年五月十日の誕生とばかりごはりますが、手掛りにはなり

ますまいかな」「稚名さへも記してない書付、あんまりばつとした物ぢやが」「スリヤ手がかりにはなりませぬか」ホイはつとばかりにどうど坐し、思ひ極めし身の覺悟。お園は形見の黒髪を、撫でつさすりつ肌に添へ、「七度結んで姉となり、六度契りて妹と、いひかはしたる甲斐もなき、親の敵をうつゝとも、夢辨へぬ稚子に、さぞや心の引かされて、迷うて居やるであらうなう。迷うてなりと今一目、姿形を見せてたも。逢ひたいわいの」と聲を上げ、くどき焦れて歎きしが、漸〻涙押とどめ、「オ、さうぢや、此切髪を添へとせば、兄弟寄添ひ居る心、先の世までもはらからの、契り忘るな」長かもじ、そのこまくらの事までも、未來へつけの櫛のはに、解きほどかれぬもつれをも、しのぎおほせて勝山と、緣起祝ひし黒髪の、色もつや〳〵烏羽玉の、闇こそ幸ひ友平は、腹存分に切りあばき、一息ほつとつき影の、出汐はおのが身の知死期、苦痛隱せど夫ぞとは、覺りしお園も氣を張詰め、「ヲ、天晴健氣の切腹は、慥に園が見屆けた。此世にござる母樣は、たとへ御用捨あるにもせよ、未來におはするとゝ樣へは、命捨てずは言譯立つまい。ヲ、よう腹切つた、出かしたなあ。とはいふものの不便や」と、悔み惜しめば友平は、一期の終り大聲上げ、「ハ、、、有りがたや忝なや、ふがひない奴めでも、家來と思し召せばこそ、お歎きなされて下さるゝ。エ、勿體ない罰當り、申譯になる事なら、下

郎めごときのどん腹を、百二百切つたとて何惜しからう。よし御宥免あるにもせよ、此樣な不吉者が、大切な敵討に、何とお供が致されませう。エヽ淺ましい業さらし」と、我と我身を搔きむしり、五體をもめば疵口より、流るゝ血汐紅に、草葉染めなす血の涙、落ちたる守の臍の緒を、引摑んで眼を見開き、「エヽ思へば〳〵腹立や。主人の敵、我身の仇、何國に隱れ忍ぶとも、一念通さで置くべきか」と、怒りの齒ぶしに嚙みしめ喰ひさき池水へ、はたと打込み引取る息、俄にはげしく逆浪打ち、吹上げ吹卷く水煙、忽お園が懷中に、音を啼く千鳥香爐の不思議、圖「ハテいぶかしや。池水はげしく立登れば、啼く音を發する千鳥の香爐。もしや吉事か、但しは凶事か。何にもせよ、怪しき業を見聞くよな」亡靈「チヽィ〳〵チィナウ」「行くと云ふのにせはしない、頻りに儕を呼返すは誰ぢやぞいやい。ヤァ何所からぢや、慥こゝらに聞えるが」と、うろ〳〵戾る銅八は、池の邊りに聞耳立て、「ヤヽ何と、明智光秀が亡魂ぢや。ハテナウ其わろが又何でおれを呼返した。ムヽ、ヒヤウ、ヤァ〳〵〳〵、すりや今まで眞實の親と思ひ居つた小島の郡代京極新左衞門は、我を拾ひし養父にて、誠の父は明智殿であつたよな。ハヽァ思ひ合せし事こそあれ、音成が館にて、四法天但馬我を見咎め、主君の面ざしに能く似たり、光秀殿の忘れがたみにてあるべしと、言つたる詞ひし〳〵と、今こそ思ひ當つたり。エ

エさは知らずしてむざ〳〵と、あつたらしき郎等を、失ひしこそ殘念々々。併し心得がたきは此年月、過行き去つて今日只今、呼びかけられし子細はいかに。ムヽ扨は、山崎の合戰に打負け、此所に命を落す際までも、帶せられたる蛙丸の名劍、久吉が手に移らん事を悔み、いきどほり、是なる池中に隱せしとや。則御首をも此池にて、洗ひ流せし其血汐、こりかたまりし魂魄殘り、守護せられたる名劍の、其名を感じ集つたる、蛙の聲をかりそめに、素姓をしらせ劍をも、讓り與へん御所存とな。ハヽ有りがたや忝や。其上に我が行末の事までも、思し召されて久吉に、遺恨の刃は合はすとも、四海に望をかくるなとは、後車のいましめ子を思ふ、父の大恩ハヽ、ハ勿體なや」と、三拜九拜悅び涙、いで亡父の御賜、拜領せんと浮草を、かき分け探り當りし名劍、押戴いて拔放せば、劍の氣を得る蛙面の相、猶も頻りに蛙の聲、又も啼出す香爐の奇特、思はず兩人飛開き、互にすかし、見て見ぬふり、劍を鞘に曲者は、納り返つて行先に、向へばよくる右左、付き纏はれし蔦かづら、「長き契りを神かけて、忘れぬ人を今更に、往なしはせぬ」と引止むる。「往來を妨げる、わりやまあ何所の者ぢや」「アイ私が生れは永祿九年五月十日の誕生」「ヤ、ハテナア、夫が又何で爰に居りやる」「ハテわしや惣嫁」「ヤ惣嫁ぢや」「サアさうでなくば傍へ寄つて、抱付いて見やしやんせ、自慢ぢやなけれど伽羅の香は、幾夜留めて

も留め飽かぬ、きだんになる氣はないかいな」と、もたれかゝれば、「有りがたい、初對面からはずんだ穿鑿、斟酌なしに付合ふからは、善は急げぢや今爰で、泣かして見たいは此懷」「ヲヲしこなしやの。肌打明けるはお前の心中」「見たくば見せう望みが有るか」「サア望んで見たいは此劍」「イヤあぶない事よしにせい」「イヤ切るわいの」「ソリヤ誰を」「ハテ指を。わしから心中見せるのぢや」と、いふより早く劍の鍔際、物打しつかととり頭、渡せ渡さじ一二のせめ、帶取り芝引きひしぐるばかり、捻合ひ引合ひ引取るはずみ、拳放れて夕顏の、棚へはからず刎上れば、取りおろさんとかけ寄るを、遣らじと支ゆるお園がひはら、土足の當身にたじ〳〵、たじろく隙に、かけ登れば、つゞいて跡よりかひぐしく、身は鼠と這上り、互に搜し尋ぬる太刀、取るよりいらつて切りかくる、强氣の曲者劣らぬお園、打合ふ刀は氷柱のごとく、微塵に碎け飛散るにぞ、跡にしさり身を構へ、「鍛ひし刀も名劍の、德におされて折れたるものか」「ヲヲ、不思議をあやしみ音を啼きし、其香爐こそ久吉が、祕藏の器物と聞きたる故、打碎いて暫時の腹いせ。又是なる夕顏の、實のりし數の瓢こそ、取りも直さず千なり瓢簞、眞柴が家の馬印、まつ此樣に」と小踊し、只一なぎに切拂ひ、直に踏込み打ちかくるを、くゞるは神力くさり鎌、ちやう〳〵はつしと請止めて、「今打ちかけたる虎亂の太刀、切先下りに打ちおろす

は、もしや尋ぬる敵か」と、いふ間稲妻劔の電光、ひらりと飛んでをちこちの、霧に紛るゝ曲者を、遁さじものと一足に、飛んでをりしも冴え渡る、月の光を力にて、跡をしたうて追うて行く。

第八

見えわたる、高根々々に消え殘る、雪のふどきの音さへも、吹きあらしたる松の風、いとど淋しく杉坂は、村山里に亡人の、名をのみ殘す石の數、邊りに立ちし竹柱、茅が軒端もそこ〳〵に、尺にもたらぬ草莚、内に音する鉦のこゑ、毛谷村の六助が、母におくれし其日より、明暮爰に在すがごとく、喪に入つて悲しみを、盡す心ぞ殊勝なり。日脚も晝に程近き、山葬の樵ども、戻りかゝつて小家の前、「六助殿どうぢやの、仕業の次手に見舞ひます」と、口々いへば念佛を止め、「ヲ、皆精が出るの。煙草でも呑んで休ましやれ」「そんなら皆一ぷくせうかい」「ヲ、よかろ〳〵」と荷をおろせば、「サア〳〵〳〵爰へ〳〵。幸ひ入ればなが沸いた、マア初穂を母者人へ、お茶湯上げて」と墓の前、供へ置いて手を仕へ、「母者人御らうじませ、皆深切に見舞つて下さつた。ア、生きてなら悦ばしやらうに、何をいうても片便り。ヤ母者人が好物

故、今朝供へた炒り物、是なと入れて茶を參れ」と、何がなあいそ差出す、あられ喰ひ〳〵、「コレ槇藏、樫六もどう思やる。死なれた婆樣は仕合せ者ぢや、一人も一人からと結構な息子を持たれた故、居られる時から生佛、今石佛になられても、アレ見やしやれ、やつぱりあの樣に、四十九日のけふまでも、三度々々拵へてする供へられるといふは、果報なわろぢやないかいの」「ヲ、松兵衞のいやる通りなれど、六助殿の孝行が、己は手ひどく迷惑するてや」「ソリヤ又なぜに」「さればいの、又してもこちの婆樣が、儕は不孝者ぢや、アノ六助を見い、六助をといはるゝ故、來て見ればあの通り。何でも昨日は孝行をやらかして見てこまそと、山を休んで打かゝり、十日前の孝行を一時に拵へ、くらひ物の喰飽、悦びは仕やらいで、ヤイのらめ、仕業はせずに役にも立たぬ錢を遣ひをると小言八百。イヤモウ孝行も自由にさす事ぢやないていなう」六「ハテそんな事はいはぬものぢや、どの樣にいはしやろとも、逆らはぬが直に孝行。親のあるうちぢや、皆隨分大事にかけさんせ〳〵」「ソレ〳〵、何所も孝行が流行るかして、六助丁どこなたの樣な大きな侍が、母親を負うて歩行くと村での噂。聞きやこなたの内を尋ねたけな、大方こりや孝行くらべに來たのぢやあらう。コレ必ずとも負けまいぞや。イヤ負けまい次手に珍しい事がある、此間から端々に、毛谷村六助と試合して勝つたなら、知行五百石で抱へうと

殿様より高札が立つたと國中は是沙汰。ソリヤ慥に殿様が、こなたを家來にせうとおつしやるを、何ほでも合點さしやれぬ故、腹立てての事ぢやあろ。なぜ又奉公さしやれぬ」と、問へば六助打笑ひ、「ハテおれぢやてゝ出世するをいやではなけれど、元劍術を覺えたも高良明神の靈驗、我に勝つ者に逢はゞ奉公せよと、神の禁破られぬ故、どなたへも斷りいうてゐるのぢや」と、聞いて皆々納得し、「いか樣尤さうな事ぢや。ガそりやさうと、いつまで爰に居るのぢやぞいの」「イヤモウ唐では三年も居る事さうなが、明日は五十日の念佛も申さにやならぬ、今夜いんで其拵へ、皆も揃うて參つて下され」「ソリヤ御造作ぢや。ヤ長話で日はたける、それ聞いてがつくりとひだるなつた。たべ立ぢやない聞立に、もういにます」と惣々が、柴荷てんでに打ちかたげ、麓をさして歸りける。六助は獨言、「皆懇な衆ぢやな。シタガ母者人は嘸やかましごんしよ。ドリヤ抹香でも繼ぎましよ」と、立つや煙も一筋に、姿には似ぬ香爐の薫、身は埋火の埋もれて、尾羽打枯れし浪人風、背に老いたる母と見え、六十を越すや坂道を、漸〳〵たどり墓近く、「イヤ申し母人、だくぼくの山道、負はれてござつても嘸御苦勞、ちと是でお休み」と、おろして敷かす菅笠の、上にいたはり足腰を、撫でつさすりつ介抱に、六助つく〴〵感じ入り、「母御さうなが、お年寄を連れまして御氣特なお侍、マアどれからどれへ

ござりますぞ」「コレハ〳〵お尋ねに預るも他生の縁、拙者は元上方の浪人者、御覽の如く母一人、老年の耳は聞えず、何卒宜しく主取致し、老母を育む種にもと、此西國へ下れども、微運の某、有付とても定らず、斯くの仕合。見ますればこなたにも御長髪の體、殊に新たなる墳墓と申し、率爾ながら御親族に」「ハイ、わしも獨の母に別れ、忌明まで墓の前で、せめて香花取りますばかり」「夫は近比御愁傷察し入る。シテこなたの御在所はな」「此麓の毛谷村六助と申す者」「ナニ、其元が六助殿。ホイ」と吐胸を差うつむく、顏打守り不審の六助、「名を聞いて濟まぬ顏色、何ぞ樣子ばしござるかな」と、尋ねられて面を上げ、「お目にかゝるも面目なけれど、申さねば叶はぬ時宜、ちと折入つて其元に、お賴み申したき儀がござるが、何とかお聞屆け下されうか」「ハテ何事か知らねども、樣子によつて賴まれませう。マア其譯はな」「成程思召もいかどなれども、只今も申すごとく、一人の此母、ぶがんの上に百日と限りある膈病、せめて一日半日も安樂にくらさせたく、勤仕を望めど心ばかり、詮方盡きし折に幸ひ、當國へ來て見れば、所々に立てたる國主の高札、毛谷村六助に打勝ちなば、五百石の知行充行はんとの儀、見るに心は飛立てども、聞及びたる六助殿、我とても一流は立つれども、中々及ばぬ未熟の某。トあつて此儘打過ぎなば、いつを春とて母人の、笑ひ顏見る時節もなし、兎やせん角

やと思案の終り、所詮義を捨て恥を捨て、勝負に負けて下さる樣、無體の賴せんものと、思ひ詰めしも母の爲、とはいひながら、武道にはづれし此願ひ、弓矢神の冥加にも盡果てん。腰拔武士人でなしと、おさけしみも存じながら、母故なればちつともいとはぬ。推量あつて右の段々、御聞入れ下さらば、御恩は死んでも忘れまじ。限りある老母が命、見立てし後は國主の御前、今の子細を申上げ、腹切つて御恥辱、其時雪ぎ申すべし。ひたすらお願ひ〳〵」と、土に頭をすり寄せて、涙と俱に賴みける。六助は物をもいはず、默然として居たりしが、やゝあつて横手を打ち、「あつぱれ〳〵感心致した。恥を捨てての御孝心、それでこそ誠の武士。いかにも聞屆けました負けませう」「エ、何とおつしやる」「イヤサア、御手練もござらうが、おそらく六助を打たん者、マア近國には覺ない。ガ我とても母におくれ、明暮戀しう存ずるばかり、親持ちし身は御同然、御志推量致した。六助こなたにぶたれませう」「スリヤ眞實聞分けられ、勝負に負けて下されんとな。ハヽア有りがたい〳〵、御恩は此身に餘る悅び。コレ〳〵〳〵母人樣、俱にお禮を〳〵」と、いへど聞えぬ雙の悲しさ、「詞に盡きぬ御情、重ねて緩々御返禮」「ア、イヤイヤ是も則ち親の恩、隨分孝心怠なく、御出世あらば我等も大慶。隙取る内に人や聞く、片時も早く試合の願ひ、再び逢ふは表向、所はきらはぬ御浪人」「ハヽヽヽ重々深き御仁心、仰に從

ひ直樣お暇」「必ず待つてをります」と、約束かたき胸と胸、解てくだけしきつする男、共に介抱母親を、負はすも負ふも孝行信義、互の目禮浪人は、別れて歸る元の道、六助跡を見送つて、「アア親といふものは有りがたいものぢやなア。見ず知らずの侍なれど、誠の心を感じた故、負ける試合を請合うたれば、悅び勇んで歸られた。是を思へば親程大事の物はない、何をするも母への追善、どうで今夜はいなずばなるまい、お墓へ水なと新しう、替へておかう」と小家の内、取出す桶は淺けれど、孝行深き谷水の、淸き流へ汲に行く。春の日も傾く運のはかなさや、何とてかゝる憂き難儀、吉岡一味齋が若黨佐吾平、お菊がかたみ稚子を、抱けど老の足弱く、杉坂越にさしかゝる。「チヽィ〳〵」と麓より、走り付いたる二人連、かますの袖も角ある人相。佐五平は立止り、「最前から呼びかけるは身どもがことか」「チヽ身どもとも〳〵。親仁どの、馴々しい事なれど、ちつとこなんに無心があつて、麓から付いて來たのぢや」「ホヲ無心とは何の無心」「ハテとぼけまい。人絕した山の中、無心といや知れた事ぢや。懷に持つて居る、路銀が借して貰ひたい」と、跡と先とを引挾み、直にはやらぬ荒稿の、横には太きしかけなり。見て取る老功にこ〳〵笑ひ、「扨はうぬら山賊ぢやな。ハアテ目利の惡い、三五日の貯はあれど、銀というて持ちはせぬ。よし有るとても我達に、借してくれる銀はない。そこのいて早通せ」と、引退

けて行過ぐるを、物をもいはず拔打に、肩先四五寸切下ぐれば、ウンとのつけに反りながら、「ヤアだまし討とはにつくい盜賊、高の知れたる下郎と侮り、不覺を取りし口惜しや」「ヤイヤイヤイ、下郎とは慮外者め。吉岡が若黨佐五平、門脇儀平見忘れたか。京極殿に一味の科、追放しられて此ざまなれど、切取するは武士の常、おのれが連れてをるは、お菊めがへり出した衣川が小悴、そいつ共にぶち放すが内匠殿の心休、覺悟してくたばりをらう」と、聞いて佐五平惚りし、「ナニ門脇儀平とな。エ、老眼故見違へて殘念々々。敵の荷擔人主人の仇、是しきのかすり疵、やみ〳〵一人死なうか」と、口にはいへど稚子の、身の上いかどと心は空、見廻す小家は是幸ひ、「ちつとの間這入つてござれ」と、押し入れて眼を配れば、すかさず二人が切付くるを、手負ながらもさすがの佐五平、拔放して切結び、二人を相手に働けども、初太刀の痛によろめく老人、切るやら突くやらはつるやら、なぶり殺しの折も折、水沒入れて六助が、戻りかゝりし此場の體、樣子知らねど飛びかゝり、二人が襟上引摑み、力に任せ投付くれば、ぎやつとばかりに絕入つたり。六助手負を引きおこし、「コレ老人、氣を慥に持たつしやれ。ホホ扨切りをつた、最ちつと早くば斯うはさすまい。コレ御老人〳〵、旅のお人」と呼生けられ、物は得いはず佐五平が、小家に指ざし手を合せ、「賴む〳〵」も口の内、深手の弱りがつくり

と、たえ入る息ぞはかなけれ。「コレ〳〵老人、ァ、もう息は絶えたか、いとしやのう。何ぢや知らぬが小家の方を指ざして、拜んだは合點が行かぬ」と、見やる小家より稚子が、走り出でて死骸の傍、「べいよ〳〵」と押し動かし、足摺りしたるいぢらしさ。「ハ、ァ是ぢやな、べいべいといふからは、定めて主の子といふ樣な事。コレぼん、こはい事はない。こなたは何所で、と〻樣の名は何といふぞ」と尋ぬれば、かぶりふつて泣くばかり、「ァまだ辨へのある年でもなし、思へば〳〵不便なこと。コレ死んだ人、氣遣ひさつしやるな、此子はおれが預つて、親御の手へ屆けます。サァ〳〵ぼんち、是からおれが連れていぬ。是はしたり、著物まで血だらけぢや」と、いひつゝぬがす四身の小袖、腰に挾んで稚子を、懷へ抱入れ、「たくましい男の子ぢや。ヲ、泣くな〳〵〳〵〳〵。ウタねん〳〵〳〵や、寢たら嚊へ連れて行こ」と、すかす間に以前の惡者、性根付きしか起上り、「ヤイ、うぬは何所から出てうせて、何で仕事の邪魔ひろぐ。ァ、聞えた、おいらをのめらせ其間に、銀をうぬがくすねたな。さうはさせぬ」と後抱、しめ付くるを見向きもせず、ウタ「ヲ、かはいものを誰がいの、起きたら山からこはい伯父が、ソレ〳〵〳〵隱りよ、ハァ」と身のひねり、前へどつさり起しも立てず、素頭みぢんに岩の角、これにもこりぬ門脇儀平、むしやぶり付くを頭轉倒、胴骨しつかと、泣出す懷。「ヲ、泣

くな泣くな〳〵。ウタねん〳〵ころゝん〳〵や、寢たらかゝへ連て行こ」踏付けられて七轉八倒、死骸は谷へ、餘念なく、我家をさして　三重立歸る。

第九

「勝負は見えた彈正殿、お手柄〳〵。立合ひ召さるゝと早勝と見えました。何と曾平治殿、違うたものではござらぬか」「いか樣軍八殿、いはるゝ通り適れ御手練でござる。ヤイ六助、我に勝つ者あらば奉公せんなどと、人もなげなる廣言は、最早是でいはれまいがな」「イヤモ段々誤り入りましてござります。何が山拝の透間には　在所の者どもを相人に、我流無法の叩き合、ヤレ六助は劍術がよいの、兵法を拔けて居るはのと、誰いふとなき取沙汰、ばつと噂立つたのが今での迷惑、誠の藝に出合うては、中々叶ふものではござりませぬ。こはやの〳〵」「ソリヤ知れた事だ。儕が雜言吐くを殿も憎しと思し召せばこそ、六助に勝れし者あらば、五百石にて召抱へんとある高札を、所々に立て置かれたてや」「ヲヽサ、然る處、鞍馬山の僧正も閉口する劍術者、微塵流の親玉が顯れ出でし故、殿にも甚だ御悅び、則御前に於て兩人が立合、御覽遊ばされたく思し召せど、家老　轟　殿が、今一息不呑込だから、儕があばらやにて立合せ、打勝つにお

いては召抱へよと、兩人へ見分の役仰付けられた。よつぽどむづかしい試合であらうと思ひの外、イヤ手間も隙も入る事か、彼城下町の煤取に、古疊を叩くより心安く見えたはい。ハヽヽハヽ。扨々先生恐れ入つた、イヤ先衣服を召替へられよ。早く〳〵」と廣蓋に、吉良流の折形包、熨斗目の衣服麻上下、御紋付に著せかゆれば、忽ち見かはす其人柄、詞付横柄に、「イヤナニそな者、假令打損けたれば とて力を落すな。是からが修行の所だから、隨分出精致したがよい。後々はよくならう〳〵」「コレ先生いらざる御教訓、お構ひなされな。ヤイ傍御領分の奴なれば、お慈悲を以て深きお咎はあるまい。なれど、以後をきつと嗜みをらう。ソレ家來ども、乘物是へ、イザ先生お召しなされ」「是は憚り、やはり此儘歩行致さう」「イヤテヤ、只今よりは殿の御師範、我々が爲にも先生なれば、ひらに〳〵」「然らば御免」と乘移るを、直に舁出すお六尺、七尺去つて師範を得、悅び勇み出でて行く。門送りして六助は、つゝくり立つて獨言、「ア、誰々も孝行にはしたいもの、見ず知らずの人なれど、親御を大事に思うて、侍のいひにくい事を打割つて頼ましやつた、其實心な所がどうも默止しがたなさ。契約の通り打まけて進ぜた今日の試合、イヤコレ必ず禮には及ばぬぞや、是もやつぱり親の威光故ぢやと思うて、存生の内に隨分と、孝行を盡さつしやりませ。おれが樣に死別といふものは、何したとてとんとま

めし氣は無いぞいの。必ず大切にさつしやれ」と、いひつゝ見やる畠道、眞黑になつて山賤ども、すた〳〵いきせき走り付き、「サア〳〵〳〵六助殿、内へ這入つた〳〵。へしやげたはいの〳〵、こちらまでも鼻がへしやげたはいの」「ハテやかましい、何の事ぢや」「何の事とはこなたの事ぢや。六助に勝つた者は抱へうと、殿樣から方々へ立てて置かしやつた高札を、奴どもが皆引拔いていんだはいの。ぢやによつてへしやげたはいの〳〵」「ソリャ何ぞあつちの勝手づくで持つていんだもので有ろぞい」「イヤ〳〵夫ばかりぢやない、六助めが頬桁とはきつい違ひ、ぶたれをつたが其いぢらしさ、大方骨が碎けたであろ。イヤ今時分は泣く〳〵天窓のかけを尋ねて居るであらうのと、口々ぬかして往にをつたが、こなさんほんまに負けたのかい」「イヤ啞ぢや、殿樣の御意ぢやから、勝負をせうと言うては來たれど、爰で立合うては晴立たぬ。殿樣のいひ付ならば、御前きろりがよい、小倉からお召しなされたら、何時でも行つて勝負せうと追戻したが、それを腹立てて惡口いうたのであろぞいやい」「ムヽさうかいなあ。それに又額の其疵は」「是か、是はあの、ハヽヽヽそれ〳〵、あの著物干しに出て、入口の石に蹴躓き、竹垣で摺破つてのけたのぢや」と、啞もまつかい血にそみし、額押へてくろめる詞、しぶ〳〵ながら栗右衞門、「イヤコレ殘りの衆ら謎がある、六助先生が今の詞とかけて」「ムヽ何と解くの」「サア極

めてある掛目よりたんとある干鰯と解く」「其心は」「ハテまけた聲ぢやと思はるゝ」と、にがり切つてぞ歸りける。「あいらがあの樣にいふのは、一手も習ふ師匠ぢやと思ふからの深切、剛染のものどもに愛想つかされても、人の爲になる事なら厭ひはせぬ。併し得心した事ながら、負けたと思やがつくりと力ない。ヤ是は扨、腹までが急に力なうなつた程にの、オツトよし〳〵、昨日庄屋から貰うたほた餅、鼠が引かずばやつぱり其儘あるで有らう。ドレ孤殿にも喰はさう」と、表に出でてそこらを見廻し、「コレ孤殿戻らしやれ。それ崖へやなど落ちまいぞ。是は又何所に遊んで居る事ぞ、孤殿〳〵。イヤ〳〵戻つた所で彼のほた餅がなくば手持ぶさた、先有るかないか見てこう」と、子供にさへも儁りを、いはぬ生得生拔きし、梅と椿の大木を、直に住家の門柱、立ち添ふ花も八重萱の、霞の屋根に蔦の壁、草の扉に彳む老女、外面に干したる四身の小袖、ハテ心得ずと差覗き、見入れる家の一壁に、鐵棒鼻捻山刀、半弓なんど懸け置きしは、山賊にてもあらんかと、心に納めしとやかに、「コレハ心願あつて國々の神社を廻る年寄の一人旅、脚を痛め迷惑致す、暫しの舍り御免なれ」と、案内聞くより六助は、納戸を出でて迎へ入れ、「見れば御老人の旅勞れ、嘸御難儀、宿はせずとも、休息程の事は緩りつと御勝手次第」「是は是は忝い、左樣ならば」と打くつろぎ、圍爐裏に緩り鑵子の下、さしくべる木もほた〳〵と、

心置なき饗應に、「イヤなう御亭主、どうやら獨住の樣に見請けましたが、左樣かの。但し御兩親でもござるかの」「イヤ〳〵、母一人ござつたれど、近き頃相果てられ、今ではほんの寡ぐらし」「ヲヽ、それは不自由にござらう。何と物はいうて見ずくぢやが、わしを親にさつしやれぬか。斯う見た所が、丁どよささうな親子ではないかいの」と、ずつかりした事いうた顏、どうやら小氣味惡洒落な。「ハヽヽ、座興も旅の憂さはらし、テモ氣の輕いお年寄ぢやなう」「イヤコレ座興ぢやない、眞實親になりませう」「ムヽそりや又なぜな」「サア心ざまの逞しさうなこなたと見込んで來た事ぢやもの、まんざら無手では來ぬはいの。コレ、爰に四五十兩程はしつかり、土產も持つて居るし、まだ其上に味い金設けの相談もあるはい。サア〳〵早う親子になつて、何もかも覆ひかくしなしに打明けて談合する氣はないかいの」と、金から取入り一詮議と、せけどもせかぬ小點頭、「ヲヽ品に寄つたら談合もせう、親にもせうが、とつくりとおれが心の極るまでは、退屈ながらあの一間で、マアゆくりと待つたがよい」「夫ならとんと腰するぞ、やんがて孝行請けませう」と、互に探る肌刀、身內と知らで誓くは、疑ひあひの破障子、引立ててこそ入りにける。跡には不審取つ置いつ、思案吹散る春風に、梅が香したひ鶯の、囀る聲に法華きやうも、既に暮れぬと告げぬらん。「ハヽ刻限も違へず鶯がもう鳥屋に來た。いか樣鳥でさへ

法華經と囀るに、身のせはしさに取紛れ、念佛もろく〳〵に得申さぬ、ア、勿體ない〳〵。申し母者人、如才やごんせぬぞや、必ず呵つて下さるな」と、位牌に向ひ合掌し、在すがごとき孝行を、感ずる天の加護やがて、深き惠みもありぬべし。一心不亂他念なく、打鳴したるりんの音に、さそはれ歸る稚子の、目もとしを〳〵なき母と、しらで焦るゝ子心に、聞覺えてや拾ひ取る、小石つみては嘘樣と、したふ涙の雨やさめ、草葉に落ちておのづから、手向の水の哀なる、寰の河原を目前に、見やる六助こらへかね、其儘かけ下り抱き上げ、「チヽ尤ぢや〳〵、尤ぢやはやい。どうぞ逢はしてやりたさに、何所ぢやと問へどわかちは知れず、勿論預けさしやつた人は、只一言も得いはぬ最期。スリヤ何國の誰が躬かは知らねど、いたいけにしをらしう、伯父樣々々々と廻すもの、憎まうとて是が憎まれうか。可愛や〳〵」「コレ伯父樣、かゝ樣はなぜござらぬ。かゝ樣ほしい、かゝ樣なう」と泣叫ぶ。「コレ其樣に親を戀ひこがれて、煩ひやなどしてくれなよ。ひよつと死んだら今の樣に、さいの河原で石の數、一重積んでは父をしたひ、二重積んでは母親を、尋ねこがれて六道の、地藏菩薩に取りすがり、父よ母よと泣くといやい。おれも二人の親に離れ、女房もなければ子供同然、ほんに親に逢はれる程ならば、さいの河原は未な事、八萬地獄の底へでも、尋ねて行きたい逢ひたいもの。何辨へない心から、逢ひたがる

のは無理ぢやない、ヲヽ、道理ぢや〳〵可愛や」と、抱しめ〳〵聲立てて、男泣にぞ歎きしが、漸〳〵涙ふり拂ひ、「ア、惡い孤殿、おれまでをそゝなかして泣かした程にの、サア〳〵さつぱりと機嫌を直して、ソレ昨日買うてやつた疣太鼓、それを叩いて遊ばしやれ。おれが守してやりませう」「イヤ〳〵太鼓いやぢや。おりやねむたい、かゝ樣と寢たいわいなう、寢さしてほしい」と稚子の、わやくも頑是なき寢入。「ホ、コリヤもう寢入つたさうな。ハテ子供といふ者は、とんと罪のない佛樣ではあるはいの。ドレ伯父が寢さしてやらうか」と、俱にふしどの草筵。折節竹の音も冴えて、吹暮しなる虛無僧の、宿求めんと籬に寄り、「ム、爰に干してある此四身は、慥に覺ある小袖」と、取らんとするを後から、こりや盜人めと二三人、摑みかゝるを寄せ付けず、振廻したる尺八の、たけた手利にぶう〳〵ども、眉間肩先腕骨脊骨、ぶちのめされてちり〴〵に、皆我先と逃歸る。六助内より屹度目を付け、「見れば賣僧の贋虛無僧、よつ程味をやりをつた」と、詰る詞を聞咎め、「ナニ贋虛無僧の賣僧とは」「ハテ掟に違うた身の廻りといひ、第一宗門の姿で、喧嘩口論ならぬ筈。又常人が理不盡をいひかけても、隨分如法に濟ませよとは、本山からの戒でないか。其上尺八の本手は嘘かず、今時流行雜な手を嘘き歩くからは、贋者というたが誤りか。山賤はして居れど、夫程の事は知つて居る。何とでごんす梵論字」と、

詞に一癖さる者と、見て取るこなたも笠脱捨て、「ヲヽ其返答して聞けん」と、ずつと入るより替筒に、仕込みし短刀抜打を、ひらりとかはししつかと取り、「フ、、、、ちよつと見るから女とは、悟つた故に咎めて見たが、敵と云はるゝ覺はないぞ」「ヤ覺ないとは卑怯なやつ、杉坂の邊りにて、五十有餘の侍を手にかけ、路銀は勿論妹が、忘れがたみの稚子まで、奪ひ取つた山賊め。赦しはせじ」と振りほどき、するどき切先無刀の六助、抜けつ潛りつあしらふ手練、遁さじものと付廻す、屏風の内より「伯母樣か」と、かけ出る稚子見て惚り、不審ながらも小脇に引抱き、心赦さず身構へたり。「コレ伯父樣、伯母樣が來てぢや、太皷叩いて見せていなう」「ヲヲ合點ぢや〳〵、後に〳〵」「イヤ今ぢや、早う〳〵」と頑是ない、まはせば廻る子可愛がり、持遊箱を引寄せて、「ソレ今鳴すぞ。コレ聞かしやれや。廿三日は母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊めが二三人、五十計な侍を、切るやら突くやらなぶり殺し、見るに見かねて片端からのめらせ、介抱すれど物も得いはず、其子を指差して拜んだばつかりがつくり往生。目前敵の盜人めら、踏殺して谷へ蹴込み、連れて戻つて其子に問へど差別はなし、そこで思ひ付いたあの著物、門口に干して置いたは、其子の所緣を知らう爲、心が早う屆いたか、現在の伯母御に渡せばこつちも安堵。ようまあ尋ねてごんしたの」と、悅ぶ體に儁りなき、眞實見ゆれど

猶も根を押し、「しかと其詞に違ひないか」「イヤ何が怖うて僞りいはう、くどい尋ねにや及ばぬ事」「シテこなさんの名は何といふ」「ヲ、六助と云ひまする」「ヤア何と」「サア毛谷村の六助といふ山賤でごんす」「ヤア、すりや八重垣流の達人と、音に聞えた六助樣か」エヽと靭れて取落す、子は狼狽へて逃込むとも、知らず構はず六助を、うつかり眺め、見とれ居る。「今の樣に云うても疑ひ晴れず、やつぱり儕を敵にするか」「エ、わつけもない、何の家來の一人や二人、どうなとしたがよいはいな」と、前に寄添ひ後に立ち、「テモマアあつぱれよい殿御、マア何よりか落付いた。イヤまだ落付かれぬ事があるはいの。イヤ申し、女房さんがござりますかえ」「イヤ子細あつて女房は持ちませぬ」「ありやせまいがな、無いかえ〳〵、ヲヽ嬉しや〳〵、それでほんまに落付いた。コレイなあ、お前の女房はわたしぢやぞえ、サア〳〵女房ぢや〳〵」と、かきたくる程今までも、逢ひたう思うた重荷がおり、三衣袋も茶袋に、仕て見たがりの水仕わざ、袈裟も襷とかけ德利、酒もあげうし夕飯の、拵せうと釜の下、薪のしめり燃えかぬる、火ふき竹はと尺八を、取違へてはをかしがり、獨御機嫌六助は、承知ない儀のふり賣を、持餘したかむつと顏、「とんと譯が知れぬ。けふ程けぶな日はない。見ず知らずのわろ達が、イヤ親にならうの嗅ぢやのと、押入女房の手引した、あの子もめつたに油斷はならぬ。全體こなたは

マア誰ぢや」と、尋ねにはつと心付き、俄に行儀改めて、いふべき事も跡や先、「常々とゝ様のおつしやるには、豐前の國毛谷村の六助といふ者こそ、劍術勝れし器量の若者、行末はそちと妻合せ、吉岡の家を相續させんと、音信通じ置きたるぞと、仰を守る此年月、廿の上を越しながら眉を其儘いかな事、鐵漿も含まぬ恥かしさ、推量なされて下さんせ」「スリヤそこもとは吉岡一味齋殿の」「ハイ、娘の園でござります」「コレハしたり」と手を取つて、無理に上座へ押直し、「先何か差置き、お尋ね申したいは御親父一味齋殿、御健勝で今にお勤なさるゝか、御老體の事なれば、自然のお勞れにて、若し御病氣など發りはせぬかと、寢ても覺ても心ならぬは是れ一つ」と、問はれて園は涙ぐみ、「申すもあへない事ながら、おいとしやとゝ様は、隣國周防の山口といふ所でな」「ヤ、何が何と、どうなされた」「口惜しややみ〳〵と、欺し討たれてはかない御最期」「イヤア、シテ〳〵其相手は町人土民でよもあるまい。假名は何と何國の誰」「同じ家中に名を得たる、劍術師範の京極内匠」「シテ此豐前へ來られしは、敵の在所は當國と、知つてか但し知らずにか」「サア所々方々と身をやつし、いふにいはれぬ憂き艱難、尋ね搜せど敵の行方、けふが日までも知れませぬはいな」「ホイ、はつ」とばかりにどうど坐し、拳を握り悔み泣。園は取分け悲しさを、やる瀨なみだのくどき言、「ほんに浮世といひながら、身に憂き

事のかくばかり、重るものか父上の、敵を願ふ門出に、可愛や弟は盲目の、儘ならぬ身を悔死、跡に見捨てて古郷を、出づるもちりぐはなれぐ、在家を捜す其内に、悲しや妹も劍の難。父上のみかそもやそも、二人三人があぢきない、刃の霜と消え殘る、母とわたしが憂き苦勞、つらい悲しい恥しい、なりも形もいとひなく、雨露雪の深山路や、野末に荒るゝ一つ家に、若しや隱れて居ようかと、人なき道に日を暮し、さまよひ歩く親と子が、便りない身の上もなき、便りの人に廻り逢ひ、わたしが心の奥底を、明かすは二世の我夫、必見捨てて下さんすな、可愛と思うて給はれ」と、あまへ歎きて伏ししづむ、悲歎の涙六助も、かゝる憂には猶更に、思ひ忘れぬ一昔、「彦山の麓にて、目馴れぬ老翁に見えしが、高良の神の使なりと、兵法印可の一卷を下されし、其老翁こそ吉岡殿と、察せし事は彼卷の、奥にあり〳〵御姓名、書添へられしはこなたの事。夫婦となつて吉岡の、家名相續致せよと、六助ごときのつたなき藝、傳へ聞かれて有りがたや、神の使と傷づて、印可を與へ其上に、汝に勝つべき者あらば、それに隨ひ身を修め、末長久に榮えよと、教訓ありしは後々まで、我慢を押ゆる御情、喩へん方もなき大恩、肉にしみ骨に通つて忘られず、母だに見送る上からは、尋ね登つて恩を謝し、師の御顔をにしにしと、拜せんものと思ひしも、皆むだ事となつたるか。エヽ殘念や悔しやな。せめての形見

師の片われ、あら懐かしや」とお園を拜し、飛走る涙はら〳〵、腸をたつ思ひにて、慕ひ歎くぞ不便なる。時に障子のうちしはぶき、「ホヽヲ師匠をしたふ誠こそ、遙に屆き冥途より、閻浮に歸る一味齋、對面せん」と聞ゆれば、思ひがけなくお園が恂り、「ヤアさうおつしやるは母樣か」と、嬉しさとつかは押開く、内ににつこと以前の老女、柔和の面皺の波、うちかけ著なし稚子の、手を引連れて立出づるを、見るよりはつと飛びしさり、師の後室とは、夢いさか、存ぜぬ事とて最前は、無骨のあしらひ無禮の段、偏に御免下されかし」と誤り入つてぞ平伏す。「イヤなう、さつきに逢うた其時は、聟殿とも姑とも、互に知らねば他人も同然、今こそ親身泣き寄りし、親子が爲には鐵の、立て通したる娘が操、不便と思ひ睦じう、夫婦になつて下さらば、本望とぐるに疑ひも、なき我夫の此魂、聟引出に」と差出せば、「ハヽヽこは有りがたき師の形見、辭退申さず頂戴せん」と、押戴きし默々の、盃三々くどからず、古ねた生娘けふよりは、手折らせ初むる花嫁御、母も悅ぶ其所へ、「爰ぢや〳〵」と杣仲間、遠慮なき骸戸板にのせ、どや〳〵と舁込んで、「コレ六助殿聞かしやませ、二十三日の事であつたがよ、此斧右衞門のおばゝが見えぬとて、仲間中が手分をしての」「ヲヽテヤ、何が所々方々を尋ね歩き、やう〳〵と杉坂の土橋の下で見付けた所がよ、此樣なおかひこ絹を引ばらせ、むごく殺

して有りましたよ。敵が取つてやりたけれど、うらどもでは何として」　弟サ、、、、そこで頼むは六助殿」と、いふにかけ下り死骸の傍、立寄つてとつくと見、「ム、すりや此死骸はそちが母か、アノ是が」フンと眉に皺、思案の體に杣仲間、「コリヤ斧右衛門、しめり伏さずと頼みやれ」と、引起されて泣ぢやくり、「アイ〳〵、皆のおいやる通りぢやよ、敵を取つて下さませ。アア死なしやるはしか其晝間、鹽梅よう出來た自慢の團子、棚からころり其身もころり、手でこねたとててこねるものか。何ぼう杣が親ぢやとて、斯しやき張つた枝骨は、おろさど桶へ這入るまい。這入りともない死出の山、覺束なかろなう婆樣、婆樣々々」と呼ぶこ烏、谺に響き泣く涙、落込む谷に水かさの、いとど增りて見えぬらん。始終とつくと聞きすまし、「ヲ、氣遣ひするな、今の間に敵はおれが取つてやる。其死骸大事にして、内へいんで香花取れ。サア早う連れて行け、早う〳〵」と六助が、詞を勢に斧右衛門、「ア、其樣にいうて下さるのが、婆樣のためにはお寺樣の御引導。ナウ皆の衆」「ヲ、テヤ、あの人がア、いはりや、ちつとも氣遣ひ」なき顏を、笑顏に直し歸りける。跡に六助無念の顏色、「扨は杣が母をたらし込み、傍が親と僞つて、孝行ごかしに六助を、深い處へやりをつたな。ヘエ思へば〳〵腹立や。卑怯未練の微塵彈正、おのれ此儘置くべきか」と、胸も張りさく怒りの齒がみ、庭の青石三尺ばかり、思はず踏

込む金剛力。「イヤコレ聟殿待たしやれや、こなたの腹を立てさつしやる相手の苗字は微塵とや」「いかにも、己が流儀を其儘に、氏となしたる微塵彈正」「ナニ其流儀の名が微塵となシテ其者の年輩は」「三十二三至極の骨柄、面體白く目の内冴え、左の眉に一つの黒痣、慥にあり左の肘、二の腕かけて刀疵」「扨こそなァ、同じ家中といひながら、お園といひ此母も、見知らぬ敵の人相書、妹に尋ね其砌、書かせ置いたる此姿繪、まだ其上に妹が、死骸の傍に有りしとて、小栗栖村にて友平が、後の證據と渡したる、此臍の緒の書付に、永祿九年の生れとある、月日を繰れば卅四の、人相といひ年の比、割符の合うたは尋ぬる敵、親の敵菊が仇、恨を晴すは今此時」「嬉しや娘片時も早う」「母樣用意」と勇立つ、「アヽコレ〳〵二人共にマア待つた。慥にそれと知れたれば、六助が爲にも師匠の仇。コレ氣遣せまい敵は討たす、ガ眞劍當てぬ其先に、木太刀で試合の意趣返し、ぶつて〳〵ぶちのめし、申請けての敵討。お袋、女房、いざ一所に」と取出す、破れ上下手傳うて、母は腰板あてがふ紐、お園が取つてしつかりと、結び合うたる妹背の緣。「コレ伯父樣、ぼんにも敵討たしてや」「ヲヽ出かした、賢いく、、強いなア。どりや行かうか」と云ふより早く、ひらりと庭へ一足飛。「コレ〳〵聟殿、輕き相手と侮つて、必不覺を取るまいぞ」「さうとも〳〵欺すに手なし、油斷をされなこちの人」「ムヽヽ何

さ何さ氣遣ひ無用。一旦こそは得心にて、負けてやつたる蛔蟲め。謀り取つたる五百石、抱へられたも我情、却つて足を繋ぎしは、もつけの幸ひ塞翁が、うまう出合うた妻姑、恨は俱に六助も、天地に慙ぢる義の一字、鬼神とて京極内匠、我見る目には一つまみ。しかし御知行戴くうちは、殿の御家人討ち得がたし。試合を願ひ勝つた上、直に仇討御免の訴訟、元首押へ討たさす」と、實も尖き魂を、見極め置きし吉岡が、眼力違はぬ若者なり。お園は猶も勇立ち、咲亂れたる紅梅の、花の一枝折持つて、「ナウ〳〵我夫、梶原源太景季は、平家の陣に切入つて、譽を揚げし箙の梅、是は敵の京極に、勝色見する兄花の、可愛男へ壽」と、いひつゝいだき付きたさも、親に遠慮の手をもぢ〳〵。母も同じく椿の一枝、「本望とげた其上で、直に八千代の玉椿、かはらぬ色の花聟殿、イザ」と打連れ立出づる、三人が中に彌三松は、ほんそう小倉の領内へ、勇みすゝんで出でて行く。

第十

豐國や、小倉に威名立浪の館には、頓て異國に出陣の、支度せはしき一家中、弓に矢をはげ鐵砲を、磨き立てたる書院先、大坪軍八堀口會平太、お目出た酒の高詰、「ナント會平太殿、かね

がね廣言吐きし毛谷村の六助野郎、憎さも憎しと存じたが、昨日の立合何か子供をなぶる樣に打ちすゑた彈正殿、恐れ入つた儀ぢやござらぬか」「成程々々、あの樣な手者をお抱へなされたは第一殿のお仕合、又そこを存じて執持致した貴殿と某、あつぱれな忠義でござる」と、話しの腰を折りからに、姿もけふぞ大國の、君に師範の勿體顏、立出づる微塵彈正、ほろ醉機嫌の千鳥足、「コレハ先生、存じの外の大酒でござるな」「イヤモ御前において悅びの御酒宴、何が若侍が取廻し、そこへも頂戴こゝへもと、さりとは〳〵こまり入りましたが、雨中の徒然、思はぬ大酒。ァ、藝が身を責めまする。ハ、、、」「成程仰の通り、殿樣にも殊ない御悅び、我我とても大慶至極。此度の異國征伐、日本無雙の其元なれば、あつぱれ高名手柄を顯はし、久吉公の御感狀にお預りなさるゝは今の事、扨々お羨しき儀でござる」と、おもねる詞に打點頭き、「成程々々、六十餘州に群る大名、我一欲しがる此彈正、お抱へあつた立浪殿は、御運の强いと申すもの、各方も異國の戰場、譽を取らすは望次第、拙者がきつと受合ひ申した」と、自慢手譽の鼻高々。時に玄關騷ぎ立ち、取次の侍あわたゞしく、「毛谷村六助、彈正樣と試合の願ひ、取次を賴み參りし所、叶はぬ由を申せども、無體に込み入る氣相ゆゑ、先お知らせ」と訴ふれば、「ナニ六助めが先生と、押して試合を望むとな。一旦甲乙別れし上、無法の願ひ叶はぬ

叶はぬ、門外へ追出せ。異議に及ばゝ打ちすゑよ。早く〳〵」「承る」と引返す、程なく人音騒がしく、是はと見やる庭先へ、こけ込む奴口々に、「下れ〳〵」と制すれど、耳にもかけず揉手して、「イヽイお願ひの者でござります、お取次頼みます」と、白洲へ通れば兩人聲かけ、「ヤア狼藉なし無法者、下れ〳〵、下りをらう」「イヤ私は訴訟の者、下れとあるはこなさん方」と、片手摑みの狗投、打付けほり付け寄付けねば、恐れて皆々尻込す。「ヤア狼藉者下りをらう」と、切刃廻せばぐつとせき立ち、「イヤコレ彈正殿、エヽ逢ひたかつたはいの〳〵。何にもくどくどいふにや及ばぬ、今一度誠の立合、サア〳〵〳〵用意召され」とせりかくるを、大坪軍八、「コリヤ〳〵慮外者めが。御師範たる彈正殿、昨日の勝負にこりもせず、恥を知らぬ山猿め、此願ひはお取上ない。早く立て〳〵」と、師匠最屓の倍押しに、彈正はしたり顔、「六助われや何しに來たやい、重ねて口を利かぬ様、しやつ頰に木太刀の極印、見る度毎に身の毛がよだつて、か様の願ひは致さぬ筈。エヽ何か今大身と成つた身どもゆゑ、膏藥代にもならうかと、根が賤しい根性から、心得違ひのもがり思案か。夫ならばさうといへ、少しばかりの合力は致してくれる程に、門前に控へをれ。エヽむさくろしいざまをして、立合々々と身の程知らぬうじ蟲め、身が目通りに叶はぬ。早く立て」「スリヤ立合はなりませぬか。立合の願ひ叶はずば、こなた

が大切にさつしやつた母御を爰へ出さつしやれ」「ヤ」「よもや是へは出されまいがな」「ヤイヤイ〳〵うぬはこりや氣が違つたな、イヤサ狂氣してをるな。コリヤ諸國を武者修行に遍歴する此彈正、母を連れてよいものか、身は獨身母はないはい」「ムヽすりや母もなく立合もなりませぬな」「くどい。最前から身に覺もなき事ども、樣々言ひかけひろぐ。五百石の御知行頂戴致し、御師範たる此彈正に向つて、過言を吐くは殿へ慮外致すも同然、惡くびこつくが否や首が飛ぶも知れぬぞよ。早く此場を立歸れ」「スリヤ立合の願ひは叶ひませぬな」「叶はぬ事ぢや早く立て」ハッとばかりに六助が、時の權威に詮方も、無念にたゆる怒りの涙、白砂を穿つばかりなり。襖のあなたにしはぶきの、聲諸共に入り來る、蘇傳五右衛門、さすが名家の執權と、いはねどしるき其人柄。「ハァコレハ〳〵傳五右衛門殿、今日は大領久吉公御入の由、御饗應の御指圖なんど、萬事御苦勞千萬でござる」「コレハ微塵氏、仰の如く今日は、假初ならぬ貴人の御入來、當家の面目此上なし」と、互の挨拶事終れば、六助白洲に手をつかへ、「傳五右衛門樣へ申上げまする、何卒彈正殿と再度の立合、仰付けられ下さらば」「コリヤ〳〵六助、儕合點の惡い、なぜ歸らぬ。魔利支天の化現といふとも、いなといはれぬ彈正殿、それ故にこそ御前より見分を遣され、お抱へあつた微塵氏、達て願へば其方が、身の爲にも宜しかるまい。お怒り

の出ぬ内、早く歸るが上分別」と、利害の詞押返し、「ハア、御尤ではござりまするが、是には深い樣子の有る儀」「ヤア樣子も絲瓜もいらぬ、所詮叶はぬ無益の願ひ、意地ばらば手は見せぬ。ソレ家來ども、きやつを御門へ引出せ」「畏つた」と下部ども、始にこりず立ちかゝるを、右と左へ投退け蹴退け、居ながら働く手利の早業。兩人は猶せき立ち、「ヤア儕こりや手向ひか」「ヲ、手向の段ぢやござらぬ、國主を重んじ忍へてゐれば、付上りのした虻侍、ばた〳〵せずと扣へてござれ。ヤイ彈正、儕よくも六助を謀つたな。老いたる母を育むためと、孝行ごかしの僞り表裏、親持ちし身はさうこそと、義によつて勝を讓り、負けてやつた昨日の勝負。母といひしは民家の老女、後難を思ひ切殺したであらうがな。かゝる姦賊、師範杯とはお家の恥辱、サア是へ出て勝負せい。斯くいひ出す上からは、取持顏のへろ〳〵武士、幾人あつても苦には致さぬ、木太刀の相伴御勝手次第」と、白洲へどつさり引きまくる、袴の裾も破れ小口。彈正はえせ笑ひ、「傳五右衞門殿お聞きなされ。イヤハヤ樣々のよまひ言、あやつは狂氣致してをりまする」「いか樣是は仰の通り、取りのぼしてをると見えます。併し只今申すを承れば、何とやら其元が、彼をお賴みなされたと、取所もない事なれども、爰に一つの氣の毒がござるは、微塵彈正六助を恐れ、再度の試合辭退せしと、下々に沙汰有つては、いよ〳〵殿の御恥辱、

立歸つて申さぬ樣、息の根止めて遣はされい」「何樣はや、其息の根の止めやうは、斯う」ト打出す小柄の手裏劍、透さぬ六助、「コリャ何するのぢや。いらざる轉合取置いて、尋常に勝負さつしやれ」「イヤナニ彈正殿、鉛刀の一割とやら、コリャ少し味をやりました。ガ貴殿には何として、叶はぬ事は知れてござれど、ほんの心ゆかしなれば、立合と申すは慮外、御指南なされて遣はされい。ソレ誰か有る、木太刀の用意」と、いやといはれぬ詞の打太刀、請流されぬ手詰の勝負。彈正は困り顏、「アイヤ物でござる、御覽のごとく事の外大酒いたし、甚酩酊仕る。其上お眼鏡を以て相濟んだる拙者が手の內、再び立合致しなば、御前の眼力暗し抔と、批判あつては甚心外、何とおの〳〵どう致さう」「成程先生のおつしやる通り、コリャよしになされたがよくござらう」「止めませうか〳〵、ア、さりとは迷惑千萬」と、主人思ひは空鞘の、安大小は鐺から、剝げかゝるこそ笑止なる。「アイヤ其儀は苦しうござらぬ。幾度にても彼めが得心いたす程、打ちすゑて遣はさるゝが其元の御名の譽、則ち殿にも御滿足。御酒はいか程參つても、六助風情が何の及びませう。幸の折からなれば、此傳五右衞門も御手練拜見致したい。御苦勞ながら只一手、ひらに先生々々」と、そやし立てられふしようぐ〳〵、わざとよろめき庭へ下り立ち、「コリャ六助、相手になるは易けれど、酒興の某、モ今日にも限らぬ事。コ

リヤコリヤ、サ、合點か。合點がいたらそこ立て」と、いひつゝよつてだまし打、鯉口四五寸、「イヤめつたに油斷は仕らぬ」と、取つたる腕首突放し、一眼二心互の身構へ、ヤア〳〵とかけ聲尖く打込むしなへ、入違へて丁と受け、拂うて引けば又付込み、上段下段右劍左劍、音はとんとん轟が、眼を配る互の太刀筋、かた唖を呑んだる軍八曾平太、祕術を盡せど彈正が、受太刀狂ひ崩るゝ五體。六助いらつて疊みかけ、脊骨腰骨りう〳〵〳〵。「南無三寶」と兩人が、六助目がけ斷けよるを、「さしつたり」と呼吸の當身、右と左へ倒れ伏す。轟聲かけ、「ホヽヲ勝負は見えた毛谷村六助、日頃の手練あつぱれ〳〵。シテ立合ばかりの願ひであるまい、吉岡一味齋が後家娘かくまふ義心、助太刀して彈正を討たさんとの心の底は、傳五右衞門承知致して罷りある」「ハヽァ御存じの上は申すに及ばず、子細有つて一味齋が、緣につながる此六助、敵討の御願ひ」と、聞くより彈正思案を極め、「いかにも、一味齋の老ほれ親仁、高慢顏がむやくしさ、飛道具にてぶち殺した。敵とねらふやつばらは、何人でも返り討、既に妹娘のお菊めも、身が心に隨はぬ故、須磨の浦で寂滅させた。六助、うぬも緣者とあらば遁れぬ所、覺悟ひろげ」と切付くる。心得六助腰刀、拔合してはつしと受け、「扨は妹お菊を殺せしもうぬが業となヱヽ重々の極惡人、生捕にして母女房に敵討の勝負さす、觀念せよ」と切結ぶ、刃の光は稻

妻の、影かさそふや降りしきる、雨の足取入亂れ、打合ふ刃音諸共に、何とかしけん六助が、刀はほつきと折れ散つたり。ソレと投げやる轟が、覺の業物取るより早く、拔放して丁ど受け、「ハテ心得ぬ。師匠より讓りの一腰、折れしは不思議」と怪しみながら、又打合す白刃と白刃、二打三打合す間も、同じく打折る微塵が手の内。けしとむ所を拜打、さしつたりと傍なる飛石、苦もなく取つて受けたる强勢、轟「ハヽァ奇妙々々。曹孟德が靑虹の寶劍にひとしく、白刃を打折りし彈正が所持の刀、夕陽を尅して雨を呼び、燒刃に顯す虹の形、數千の蛙鳴叫ぶは、ハヽハヽ、實まこと小田の重寶、蛙丸の劍の威德。いかなる名作名劍も、此劍に合はす時は、忽ち折るゝと聞傳へしが、不思議を眼前見し事よ」、と詞は膽にこたゆる彈正、引取る刃に付け入る六助、鍔元しつかと、六「ムヽすりやお尋ねの蛙丸、是を所持する微塵彈正」轟「ホヽヲ問ふまでもなく謀反の殘黨。春永亡び給ひし後、明智が手へ渡りし名劍、隱し持つたる微塵彈正、おのれと顯はす喜怒骨は、明智が血脈受繼ぐ證跡、何と違ひはあるまいが」と、星をさいたる明智の眼力、神力加はる六助が、程よくもぎ取る蛙丸、傳五右衞門に差出せば、「ホヽヲ六助出かした。最早遁れぬ微塵彈正、尋常に覺悟せい」「ホヽさすがの轟よく見出した。推察の通り、父が無念を散ぜん爲、立浪家へ入込みしは、久吉に近寄つて仇を復せん我が大望。斯く顯はれし上

からは、彈正が死物狂ひ、館の奴原撫切」と、眼配つて突立つたり。かねて用意やしたりけん、組子の大勢得物引つさけ追取卷く。轟聲かけ、「ヤア〳〵者ども、大切なる國家の科人、廣庭へ追出し、取逃さぬ樣搦取れ」ハッと一度に組子ども、遁さぬ行らぬとひしめいけり。「ヤアちよこざいな蚊蜻蛉めら、此世の暇をくれんず」と、切立て〳〵手を碎き、奥庭さして追うて行く。跡に六助兩手を突き、「蛙丸の名劍はからず御手に入る上は、此寸功に敵討御免なし下されよ」と、餘儀なき願ひに傳五右衞門、「尤なる訴訟なれども、彈正は大切なる科人、土民の手へは渡しがたし。元來主人春時殿、懇望の汝なれども、高良明神の告により、勝りし者に仕へん望。幸かな今日大領お成なれば、御上覽を願ひ、諸大名の御内に於て名ある勇者を片家に立て、角力の勝負は神慮に任せ主取せよ。蛙丸を奪ひ返せし功を以て、敵討は請合たり。いかに〳〵」と轟が、始終を計る取さばき。六助ぞく〳〵小踊りし、「面白し〳〵。望む所の主君定め、畏り奉る」と、卽座の領掌、「此身の願ひ、本望遂ぐるは今の間」と、悅び勇む折こそあれ、久吉公の御入と、のゝめく聲、「アレ六助、仙桃花咲く時來れり、直樣用意」と勵す内、心得小姓が白臺に、積む卷絹の勝色を、しやんとしめたる取りまはし、一ふり振出す古木の松、兩腕兩足踏みならす、あつぱれお相撲伊達男、野見の宿彌の昔にも、をさ〳〵劣らぬ關相撲。漸く氣の

付く堀口大坪、うろ〳〵眼に前後を忘れ、切つてかゝるを傳五右衛門、かはす間拔く間蜉蝣の、二人は四つに朱の浪、打つて捨てたる手の内に、六「ハ、あつぱれお見事。併し此兩人をお手討になされては」「イヤサちつとも苦しうない、彈正に荷擔人せし人非人、蛙丸の切味、敵討の血祭よし。早〳〵御前へ土俵入」と、淸むる刀化粧紙、四本柱の御家老に、つれて御前へ三重出でにける。數年の積惡身を責めて、立浪の廣庭に、多勢を相手に微塵彈正、一流立つるさしもの働き、抓人もあぐんで見えたる所へ、春時の下知を請け、駈付くる聶傳五右衛門、「ヤア彈正、謀反の殘黨其罪遁れず、聶が搦取る、腕を廻せ」と、十手振上げ詰寄つたり。「ホウ誰彼の相手は嫌はぬ、冥途の道連イザ來い」と、又も二人が挑合ふ。四方を圍む組子の人數、暫く時をうつす內、一もくさんに砂煙、馳せきたる使番、「扨も六助、御前において相撲の勝負、第一番に田中の舊臣井富三郎、取付く間もなくそつ首落し、二番は兩國笹部野九郎、只一刎に刎飛ばされ、赤面せき立つ三ばん手、盛尾の郎黨別所貞宗、力を盡せど稀代の六助、一聲叫べば土俵の外、投付けられて入り替る、片岡、宮田、郡の一統、家中に勝れし勇士ども、息をも繼がせず立合へど、或は矢筈肩透かし、あふりむさう無雙の神力、二十六番つゞけ投、皆六助が勝相撲」と申し捨ててぞ引かへす。「いさぎよし〳〵。相撲終らば敵討御赦免は必定、繩目の恥辱を

受けんより、武士の冥加と覺悟せよ、彈正何と」といはせも果てず、「ヤア敵討も絲瓜もいらぬ、刃向ふやつ原ぶち放し、久吉の猿冠者め、素頭取つて父の孝養、邪魔せず と立去れ」と、ひるまぬ我慢轟が、ソレと指圖に組子の面々、卷いて拂らんとつく棒刺股、請け流し切拂ひ、爰を先途と働きける。「つどいての勝相撲毛谷村六助〳〵、三十七番の割付の主、急いで立合へ立合へ」と、行司が詞、溜より、佐藤の家臣萬團右衞門、六尺ゆたかの大男、力も嘸としら綾の、下帶しつかと御前に一禮、ゆらり〳〵と土俵の內、勝ちほこつたる六助が、劣らぬ大兵顏見合せ、じつと互に居合腰、程よく行司が引く團扇、ヤツとたける團右衞門、押出さんとコリヤコリヤ〳〵、神變ふしぎの六助が、どつこい動かぬ兩足は、金輪際より生拔くごとく、肘がらみを振りほどき、えいとかけ聲諸共に、地ひどき打つたる團右衞門、砂にまぶれて負相撲、各どつとざゞめきて、しばらく鳴も止まざりける。溜の內より聲高く、「飛入々々々々」と、自身名乘つて出でたるは、小兵ながらも福島の、御內に名を得し桂市兵衞、拾うてくれんと力瘤、五尺にたらぬ身あんばい、健氣にも又不敵なり。六助につこと打笑ひ、構へゆたかに待ちかくる。合圖の團扇引くやいな、遲しと四つ手に引組んだり。雪降り積る松が根に、からみ付いたる桂が手だれ、惣身の力を腕に入れ、大の男をしめ付け〳〵、持出さんと釣上ぐる。シヤも

のものしと六助が、勵す一聲雷の、落つるがごとく押付くれば、さしもの市兵衛たもち得ず、尻居にどつさり六助へ、又も擧げたる團扇の響れ。割付も三十八番目、待ちまうけたる三浦又藏、實も加藤正淸の、股肱と目立つて見えにけり。御樣敷を始とし、諸侯の面々息を詰め、これや結びの關相撲と、鳴をしづめて見物あり。さつと引取る團扇の風、力くらべ、根くらべ、祕術を盡していどみ合ふ。神明擁護の金剛力、さしもの又藏持て餘し、危く見ゆれば主人正淸、樣敷より聲高く「ヤア〳〵六助、最早勝負も是一番、敵討の願ひ叶ふ大切なる此相撲、氣を付けよ」と敎への詞、ハツと六助正淸の、智仁の一言磐石に、押さるゝ如くたぢ〳〵、心も折るゝ片膝は、三世の緣の禮儀始、上下一度に擧むる聲、感心の聲一時に、浪の打來る如くなり。正淸俱に感じ入り、「數番の働き六助が勇猛、今よりしては我良臣、貴田孫兵衞と改名し、忠勤怠る事なかれ」と、稱美の詞に有りがた涙、溜りに控へし母お幸、お園諸共かけ付けて、「お手柄お手柄。此上は敵討御免のお願、恨を晴すは今の間」と、詞少く取形も、行儀正しき武家育。六助も御前に向ひ、「是こそ一味齋が後家娘、微塵彈正と敵討の勝負、仰付けられ下さる樣」と恐れ入つて言上す。「ホヽヲ其儀は氣遣ふ事なかれ。尋ね求むる蛙丸、手に入りしも汝が働き、蟲傳五右衞門に申付け、敵討の用意せさせ置きたれば、かしこへおもむき本望とげよ。則ち君の

御帶刀汝へ下し置かるゝ間、有りがたく頂戴せよ」と、吹擧の御太刀取次にて、孫兵衛へ賜はりける。「時の面目身の冥加、生々世々の御厚恩、首尾よく本望とゞ終り、唐高麗まで御供して、馬前に報じ奉らん」と、三拜九拜拜領の、刀は名作名大將、「いそふれやつ」と正清の、詞の加勢百萬騎、勇みすゝんで　三重かけりゆく。

第十一

既に角觝の勝負も、をさまる番數譽むる聲、磯打つ浪と動搖し、山河にとどろき傳五右衛門、仁義の吹擧に敵討、御免なりしと聞傳へ、馳せあつまつたる見物ども、さしも廣野に充滿し、錐を立つべき皷もなし。斯くて毛谷村六助は、相撲の場所より改名し、貴田孫兵衛と勇有つて、猛き骨柄美を盡す、大小さすが萬卒を、覆ふ器量の弓取風、いう〳〵と出で來れば、「ソリヤ毛谷村の柴苅が、出世した振見よ〳〵」と、前後を取卷く人群集、孫兵衛きつと見廻し、「ヤア騷しゃ方々、今日は大切の敵討、斯く群つては勝負の妨、片寄れ開け」と、制すれども、向ふは猛勢一人の、聲屆かねば「まつかせ」と、竝みしげりたる大木の、松を兩手に一ゆすり、ぐつと引きぬき横倒し、行馬としたる怪力に、舌を震はし諸見物、一度にしんとしづまれり。一期

の晴と義に勇む、吉岡が妻娘、彌三松が手をとりぐ〜に、行馬の内へ入來り、「コレ〳〵孫兵衛殿、イヤナウ聟殿、上々樣のお蔭により、數日の仇をけふの今、晴らすと思へば嬉しうて、胸つぼらしい。此嬉しさを見やうより、一味齋殿ながらへてござるなら、何此上あらうぞ」と、いふにお園も打しをれ、「わたしとてもこがれたる、殿御には逢ひ敵にも、廻り逢うたる嬉しさも、お菊が無事で居やるなら」「ヲイナウ、可愛や是が形見かと、孫が手を取り抱きしめ、顏見合せて親と子が、不覺の涙にかきくれて、さめぐ〜泣くこそ哀れなる。孫兵衛は聲勵まし、「ヤア二人共見苦しき繰言、早く敵の首ひつさげ、未來におはす先生の、位牌に手向くる氣はなきか」と、制する詞に兩人が、實もと涙押拂ひ、人目を羞づる紅の、絹引しごいて花襷、用意とりぐ〜なる所へ、久吉公より檢使として、加藤虎之助正淸、先を拂つて入り來れば、今ぞ籠中のとり圍まれ、猶も我慢の彈正が、歩むものつさのさばり頻、跡に引添ふ傳五右衛門、行馬の内へ入る折から、息を切つて衣川彌三郎、加藤が前に兩手を突き、「拙者儀は郡音成が家來、衣川彌三郎と申す者、一味齋が妻子の者、今日當所に仇討をいたす條、主人音成承り、御厚情を謝せん爲、一つは又見屆のため名代として、只今參上仕る」と、申述ぶれば母娘、殿の上意の今更に、又も涙の嬉し泣。正淸は威儀を正し、「コレハ〳〵御丁寧の御使者、人も多

きに彌三郎殿、差越されしは豫てより、餘所ならぬ敵と聞き、音成公の御心配、感じ入つて候」と、情の道も疎からぬ、實に眞柴家の良臣なり。正淸重ねて轟に打向ひ、「雙方支度調はゞ、早く勝負」と嚴重なる、指圖にはつと傳五右衞門、立上つて聲高く、「早く雙方立合ふべし、互に疲るゝ其時は、太鼓をもつて知らさん間、未練の働なき樣に」と、下知につつ立つ微塵彈正、「成上りの蟻を後楯、此彈正を討たんとは不敵至極の女原、不便なれども返り討、覺悟ひろげ」と惡言を、聞いてにつこと母お幸、「ヤ武士に似合はぬ無益の多言、初太刀母が」と立向へば、彈正も惡びれず、水をたゝへし器の傍、じりゝゝと步み寄り、呑むより早く打破る茶碗。長刀かい込み、「いかに京極、汝が非道の手にかゝり、空しく果てたる一味齋が妻お幸、サア尋常に勝負々々」と身がまへたり。「ヤア婆婆ふさげの雲雀婆、雲雀親父が跡追うて、地獄へ行け」と腰刀、拔く手も見せず切付くるを、透さず受止め刎返すを、直に付け入る虛々實々、祕術を盡して戰へども、するどき刃にお幸が受身、危く見ゆれば合圖の太鼓、「どつこい」下部が押しわくれば、跡へかはつて新手のお園、小太刀をふつて立向ふ。後に孫兵衞聲をかけ、「せいては事を仕損ずる、心をしづめて戰へ」と、力を付くる夫の前、諸萬人より晴の場と、胸を定めて聲勵まし、「日外都小栗栖にて、それと名乘らで逃失せたる、臆病武士の京極內匠、親の

敵妹が敵、一時にはらす恨の刃、首さし延べて請取れ」と、いふより早く打つ刀、丁ど受止め嘲笑ひ、「ハ、、、、、、引さかれめが味をやる、勿體ながら京極が、お手おろさるゝ太刀の下、亡くなりをらう」と一打に、微塵流儀の手を盡す、落花狼藉八重垣の、流儀流水澱みなき、手練の切先ちやう〳〵〳〵、時を移して　三重打合うたり。かすり手負へども強氣の内匠、まつしくらに切りまくれば、思はず跡へたじろくお園、あはやと見る内孫兵衛が、刃の電光袈裟切に、すつぱと肩先彈正が、うんとのめるを起しも立てず、「夫の敵」「父の仇」「かゝ樣の敵、覺えたか」と、孫も俱々ずた〳〵に、切つて悅ぶ母娘、とどめをさしもの馬印、大籏小籏日に映じ、風になびきて翻翻たり。正淸いさんで「手柄々々、アノ行列は大將の、御出船と相見ゆる。衣川殿は國元へ、二人の女を同道あれ。轟氏は跡の儀を、よろしく計らひ召さるべし。イヤ孫兵衛は本陣へ」と、急ぐは加藤虎之助、威勢は千里萬里にも、類ひまれなる大勇猛、すぐに三韓征伐の、出陣急ぐ勇み足。天の征する惡人は、亡びて小氣味よし岡が、運に勝つたる敵討、誓ひの助太刀太刀風に、治まりなびく天が下、惠みにそだつ竹の葉の、榮えさかふる君が代は、萬萬歲とぞ祝ひける。

彥山權現誓助劒終